

國學院大學文学部考古学実習報告 第28集

長野県木曾郡開田村

柳又遺跡 A 地点

YANAGIMATA-A SITE

第5次発掘調査報告書

1996

國學院大學文学部考古学研究室

國學院大學文學部考古学実習報告 第28集

長野県木曾郡開田村

柳又遺跡 A 地点

YANAGIMATA-A SITE

第5次発掘調査報告書

1996

國學院大學文學部考古学研究室

監修

小林達雄

構成・編集

宮尾 亨

本文執筆・挿図作成・写真撮影

中野拓大 仲田大人

角田真也 見田有美子 新田康則

中山貴正

田口 香 新生 実

菅原伸也 津田俊輔

協力

小俣貴一

野村忠司 及川真紀

宇賀神菜採

谷地亜希子

設楽政健

序

長野県木曾郡開田村に所在する柳又遺跡A地点の第五次発掘調査報告書をここに御送りする。御嶽山の麓の開田高原での発掘調査に取りかかって七年に及んだ。発掘とは、勉強のためとは云條、遺跡の破壊を招くことであり、この避け難い重大な事実をよくよく認識せねばならない。そのためにも極く限られたものだけでなく、関心を寄せる者全てに等しく発掘現場に立合う機会があるべきだと考える。だからこそ実習生のみにとどまらず、その他に学部生や大学院生そして他大学生の参加を得て来たのである。そして此度もまた相応の成果をあげることができたが、これまでに蓄積された成果の上にはじめて成し遂げたものであることを承知している。さらに次の年へと継承してゆくのであり、とにかくそのリレーの責務を果たすことができたことを共によろこびたい。

この間、考古学実習室には連日連夜の遅くまで明かりがとまり、その利用時間を換算すれば、大学中で最も長くなるであろう。本書は、そうした努力の結晶である。それにも拘らず、内容にはいくつもの不備もあろうが、それはそのまま考古学とともに実践した軌跡の記録である。諸賢におかれましては、忌憚のない御批判と御指導を御願います次第である。

なお、いつもながら長野県教育委員会、開田村教育委員会より賜った御指導と御力添え、そして遺跡の地主村上和幸氏、下村喜美代氏、食事の世話など種々御便宜いただいた嶺見商店、さらに市郷学園研修センターを宿舎に御提供いただくなどの相も変らぬ御好意を賜った末岡照章理事長など多くの諸氏、諸機関に改めて衷心より感謝申し上げる次第である。

1995年2月13日

小林 達雄

例 言

1. 本書は國學院大學文学部が実施した長野県木曾郡開田村柳又遺跡A地点における第5次発掘調査の報告書である。
2. 柳又遺跡A地点の地籍は、長野県木曾郡開田村大字西野6503-1番地である。今回は村上和幸氏所有の畑地36㎡を発掘調査の対象とした。同時に柳又遺跡D地点とした畑地（下村喜美代氏所有 長野県木曾郡開田村大字西野6503-3番地）で8㎡の試掘を実施した。
3. 発掘調査は考古学実習の一環として実施したもので、國學院大學学長春田宜が主体者となり文学部教授小林達雄が担当した。発掘調査及び報告書の作成は、文学部教授永峯光一、加藤晋平、小林達雄、吉田恵二、文学部助手官尾亨が指導にあたり、考古学実習生10名が従事した。
4. 第5次発掘調査は、1993年9月13日から9月22日までの10日間にわたり実施した。
5. 発掘調査の計画・実施には、長野県教育委員会、開田村教育委員会より指導・協力を得た。
6. 調査団の宿舎には、学校法人市部学園より同学園開田高原研修センターの提供を受けた。
7. 本書6頁の遺跡付近の地図は、国土地理院発行の5万分の1木曾福島の一部を転載した。
8. 発掘調査および整理作業には、多数の方々の参加・協力を得た。また、発掘調査および整理作業の過程で見学者各位より数々のご教示を賜った。巻末に御芳名を記して謝意を表する次第である。
9. 本書の挿図作成、写真撮影、ならびに本文執筆は、小林達雄・官尾亨の指導のもと、考古学実習生 見目有美子、新生実、菅原伸也、田口茜、津田俊輔、角田真也、仲田大人、中野拓大、中山貴正、新田康則が分担した。各文末に執筆分担者名を明記した。
10. 本書の構成・編集は官尾亨が行い、小林達雄が監修した。
11. 本発掘調査によって出土した遺物および記録類は、國學院大學において保管している。
12. 第1次～第4次発掘調査までの調査研究成果については下記の報告書・論文が既に刊行されている。併せて参照されたい。

小林達雄編 1990「柳又遺跡A地点 第1次発掘調査報告書」考古学実習報告第19集 國學院大學文学部考古学研究室

谷口康浩 1991「木曾開田高原柳又遺跡における細石刃文化」『國學院雑誌』第92巻第2号 21～51頁 國學院大學

小林達雄・谷口康浩編 1992「柳又遺跡A地点 第2次発掘調査報告書」考古学実習報告第21集 國學院大學文学部考古学研究室

谷口康浩 1992「開田高原柳又遺跡A地点の発掘調査」『第5回 長野県旧石器文化研究交流会—発表要旨—』 47～57頁

永峯光一・谷口康浩編 1993『柳又遺跡A地点 第3次発掘調査報告書』考古学実習報告
第23集 國學院大學文学部考古学研究室

谷口康浩・宮尾亨編 1995『柳又遺跡A地点 第4次発掘調査報告書』考古学実習報告第
26集 國學院大學文学部考古学研究室

凡 例

1. 石器の実測図は原則として三角投影図法に換った。
2. 石器の各部位の名称と計測基準、石器・礫の分類基準は次々頁に図示した通りである。
3. 器種認定された石器は石器実測図を掲載し、文化層毎に通し番号を付してある。本文中および石器計測表にある石器番号は、この通し番号である。
4. 石器実測図には、石器番号に続けて石質と出土グリッド・出土層位を記した。石質記号は次の通りである。
an: 安山岩 ch: チャート gla: 玻璃質安山岩 ob: 黒曜石 san: 砂岩 sh: 珪質頁岩
5. 母岩別資料の分類は、遺跡の部分的な調査の過程で行うには限界があり、本遺跡の調査完了後に資料全体を通して見直す必要があるが、当面は掲載した母岩別資料について文化層毎に通し番号で記す。
6. 母岩別資料の掲載石器実測図には、各母岩別資料別に通し番号を付してある。
7. 本報告書に掲載した石器実測図の縮尺は、剥片石器3/4、礫石器1/3に統一してある。
8. 本報告書に掲載した挿図は、各文化層毎に石器分布図、遺構分布図、石器実測図、母岩別資料実測図、母岩別資料分布図の順になっている。詳しくは挿図目次を参照されたい。
9. 分布図の掲載縮尺は書面の都合上各図によって任意となっており、主な縮尺に1/40、1/80がある。挿図目次ならびに各図を参照されたい。
10. 垂直分布図における基準標高は、原則としてA地点は1123.000m、D地点は1127.000mに統一してある。しかし、発掘調査区域の層序の提示では、書面の都合上1124.000m、1127.500mの2種類の基準の標高を用いている。注意されたい。
11. 石器計測表は、巻末62～64頁にまとめて掲載してある。詳しくは表目次を参照されたい。
12. 石器計測表は石器実測図を掲載したものに限っているが、第1次～第5次発掘調査資料はすべてデジタルデータを作成し、國學院大學において保管してある。
13. 石器・剥片の遺存状態について、断口面（折れ面）が認められる場合には、以下の定義に従い記述上「折断」「折損」「破損」を区別した。なお、耕作等による現代・後世の破損については、実測図において破損部の剝離面・断口面を白抜きとした。

折断：細石刃や石刃に見られる断口面のように、石器の加工あるいは石器素材の分割を目的とした意図的な折断と認められる場合か可能性の考えられる場合をさす。

折損：槍先形尖頭器・ナイフ形石器・縦長削器に見られる断口面のように、各器種に本来備わる定形的な機能形態が折れによって損なわれている場合をさす。

破損：断口面に限らず、石器・剥片の原形が損なわれている場合を破損と総称する。

14. 石質の比較的粗悪なチャートの礫が被熱等によって節理面に沿って角状に細かく砕けたものの総称について、第4次発掘調査報告書ではそれまでの「砕片」という分類名を改め、「礫」に含めている。本書は第4次発掘調査報告書に準じている。

15. 本遺跡の各文化層名称は、石器群ならびに礫群の出土層位に基づいた呼称である。本書では、第4次調査において提示された以下の文化層名称を用いている。

第V層文化層：第V層に集中する石器群ならびに礫群や配石。細石刃の文化層。配石2基、礫群7基がある。

第VI層M文化層：第VI層中位に集中する石器群ならびに礫群。ナイフ形石器の文化層。礫群1基、石器ブロック1ヶ所がある。

第VI層L文化層：第VI層中位から下位に集中する石器群ならびに礫群。ナイフ形石器の文化層。礫群1基、石器ブロック1ヶ所がある。

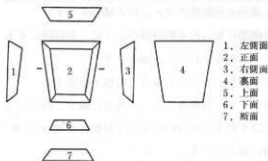
第VII層文化層：第VII層上位に集中する石器群ならびに礫群。ナイフ形石器の文化層。礫群2基、石器ブロック2ヶ所がある。

16. 各文化層における石器群の平面的分布の視覚的なまとまりは、第4次発掘調査報告書でそれまでの「石器ユニット」の用語を「石器ブロック」に改めている。本書は第4次発掘調査報告書に準じているが、第5次発掘調査では、いずれの文化層においても石器ブロックは把握されていない。

17. 引用参考文献は65頁に掲載した。

18. 発掘調査参加者・関係者一覧は66頁に記載した。

石器各器種の各部名称・計測部位

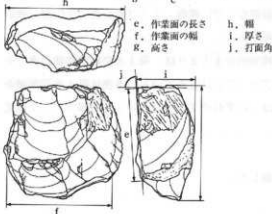
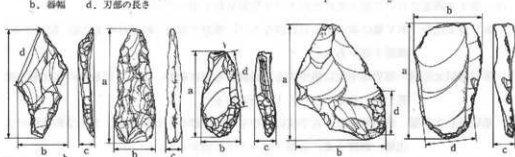


1. 左側面
2. 正面
3. 右側面
4. 裏面
5. 上面
6. 下面
7. 断面



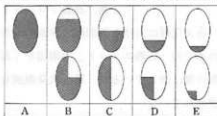
1. 背面
2. 右側面
3. 前面
4. 打面角
5. 斜削角

- a. 器長 c. 器厚(最大厚)
b. 器幅 d. 刃部の長さ



- e. 作業面の長さ
f. 作業面の幅
g. 高さ
h. 幅
i. 厚さ
j. 打面角

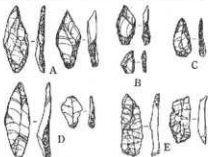
礫群構成礫の遺存状態



- A: 完形
B: 全体の3/4以上を残す破砕礫
C: 全体の約1/2を残す破砕礫
D: 全体の1/4を残す破砕礫
E: 小部分の破片

(水本・谷口編 1993)

ナイフ形石器の形態分類



- A: 鋭い先端をもち、二側縁に調整を加えたナイフ形石器。石刀を素材とし、折断技法によって素材の形状を大きく変形している。素材の打面は除去される。
B: 剥片を素材とし、二側縁調整によって切出形に整形されたナイフ形石器。小形のものが多い。
C: 石刀を素材とし、一側縁に調整を加えたナイフ形石器。素材の形状をほとんど変形せず、打面も残置する。
D: 石刀・縦長剥片を素材とし、その打点側を基部として、基部両側縁の腹面側に調整を加えた基部調整ナイフ形石器。素材の形状を大きく変形せず、打面を残置することがある。
E: 石刀を素材とし、先端を斜めに折断するように急傾度の調整を加えた部分調整ナイフ形石器。
(小林・谷口編 1992)

目 次

第 I 章 発掘調査の目的と経過	1
第 1 節 発掘調査の目的	1
第 2 節 第 5 次調査の経過	4
(1) 発掘調査の経過	4
(2) 整理作業の経過	5
第 II 章 開田高原と柳又遺跡	7
第 1 節 柳又遺跡の位置とその地理的環境	7
(1) 柳又遺跡群の位置と地理的環境	7
(2) 周辺の遺跡	7
第 2 節 第 5 次発掘調査	9
(1) 発掘調査区域の設定	9
(2) 基本層序	12
(3) 遺跡の地形と調査区層序	13
(4) 出土遺物の概要	16
(5) 表採資料	20
第 III 章 第 V 層文化層	21
第 1 節 概要	21
第 2 節 遺物分布状況	22
(1) 分布状態	22
(2) 検出層位	22
(3) 第 7 号礫群	24
第 3 節 石器	31
(1) 石器	31
(2) 接合資料と剥片剥離技術	32
第 IV 章 第 VI 層 L 文化層	35
第 1 節 概要	35
第 2 節 遺物分布状況	36
(1) 分布状態	36
(2) 検出層位	36

第3節 石器	38
(1) 石器	38
(2) 接合資料と剥片剥離技術	39
第V章 第VII層文化層	45
第1節 概要	45
第2節 遺物分布状況	46
(1) 分布状態	46
(2) 検出層位	46
第3節 石器	48
第VI章 D地点試掘	51
第1節 概要	51
第2節 遺物分布状況	54
(1) 分布状態	54
(2) 検出層位	54
第3節 石器	56
引用参考文献	65
発掘調査参加者・関係者一覧	66

挿図目次

第1図	柳又遺跡群の位置と周辺の遺跡(1/5000).....	6
第2図	遺跡周辺の地形と発掘調査区域(1/1250).....	10
第3図	発掘調査区域と調査層位.....	11
第4図	遺跡の基本層序(1/20).....	13
第5図	発掘調査区の層序(1/40).....	14
第6図	第5次調査遺物出土状況(1/40).....	15
第7図	第V層出土の石器 器種別分布状態(1/40).....	17
第8図	第VI層出土の石器 器種別分布状態(1/40).....	18
第9図	第VII層出土の石器 器種別分布状態(1/40).....	19
第10図	縄文時代の土器(1/1).....	20
第11図	第V層文化層の石器 器種別分布状態(1/40).....	23
第12図	第V層文化層の礫群の位置(1/200).....	24
第13図	礫の分布状態と第V層文化層第7号礫群(1/40).....	25
第14図	礫の重量・被熱状態と第V層文化層第7号礫群(1/40).....	26
第15図	礫の接合関係と第V層文化層第7号礫群(1/40).....	27
第16図	第V層文化層の石器：細石刃・槍先形尖頭器・削器・石刃状剥片・石核(3/4).....	30
第17図	第V層文化層の石器：敲石(1/3).....	31
第18図	第V層文化層母岩別資料15：接合図(3/4).....	33
第19図	第V層文化層母岩別資料15：分布図(1/80).....	33
第20図	第VI層L文化層の石器 器種別分布状態(140).....	37
第21図	第VI層L文化層の石器：ナイフ形石器・石刃・細部調整剥片(3/4).....	38
第22図	第VI層L文化層母岩別資料6：接合図(3/4).....	40
第23図	第VI層L文化層母岩別資料6：分布図(1/80).....	41
第24図	第VI層L文化層母岩別資料7：接合図(3/4).....	44
第25図	第VI層L文化層母岩別資料7：分布図(1/80).....	44
第26図	第VII層文化層の石器 器種別分布状態(1/40).....	47
第27図	第VII層文化層母岩別資料7：接合図(3/4).....	49
第28図	第VII層文化層母岩別資料7：分布図(1/80).....	49
第29図	D地点 調査区の層序(1/40).....	52
第30図	D地点 石器器種別分布図(1/40).....	52
第31図	D地点 礫の分布状態(1/40).....	53

第32図	D地点	礫の重量・被熱状態(1/40).....	53
第33図	D地点	出土石器(1)両面調整石器・槍先形尖頭器・ナイフ形石器・石刃(3/4).....	57
第34図	D地点	出土石器(2)石刃・石刃状剥片・細部調整剥片(3/4).....	58
第35図	D地点	出土石器(3)削器(3/4).....	59
第36図	D地点	出土石器(4)敲石・台石(1/3).....	60

表 目 次

表 1	A地点	第V層文化層の石器.....	62
表 2	A地点	第V層文化層母岩別資料15.....	62
表 3	A地点	第VI層L文化層の石器.....	62
表 4	A地点	第VI層L文化層母岩別資料 6.....	63
表 5	A地点	第VI層L文化層母岩別資料 7.....	63
表 6	A地点	第VII層文化層母岩別資料 7.....	63
表 7	D地点	出土石器計測表.....	64

写真目次

図版 1	1. 柳又遺跡より西野川を望む
	2. A地点よりC地点を望む
図版 2	3. 遺跡の現状(東から)
	4. 遺跡の現状(北から)
図版 3	5. 発掘調査風景
	6. 発掘調査風景
	7. 発掘調査風景
図版 4	8. 発掘調査風景
	9. 発掘調査風景
	10. 発掘調査風景
図版 5	11. 耕作土を除去した状態(北から)
	12. 発掘調査風景
	13. 発掘調査風景

- 図版 6** 14. 遺物出土状態 第V層・第VI層 (C-15・16区) 南から
 15. 遺物出土状態 第VI層 (A・B-15・16区) 南から
- 図版 7** 16. 発掘調査風景
 17. 発掘調査風景
 18. 発掘調査風景
- 図版 8** 19. 遺物出土状態 第VI層 (A・B-15・16区) 南から
 20. 遺物出土状態 第V層・第VI層 (Z-15・16区) 南から
- 図版 9** 21. 剥片の出土状態 第V層 (Z-15区)
 22. 石核の出土状態 第V層 (Z-15区)
 23. 槍先形尖頭器の出土状態 第V層 (Z-15区)
- 図版10** 24. 槍先形尖頭器とナイフ形石器の出土状態 第V層・第VI層 (Z-15区)
- 図版11** 25. 第V層文化層 第7号礫群 (C-15・16区) 南から
 26. 第V層文化層 第7号礫群 (C-15・16区) 南から
- 図版12** 27. 発掘調査風景
 28. 発掘調査風景
 29. 発掘調査風景
- 図版13** 30. 調査区の層序 (Z-15区) 西から
 31. 調査区の層序 (Z-16区) 西から
 32. 調査区の層序 (Z-16区) 南から
- 図版14** 33. 調査区の層序 (A-16区) 南から
 34. 調査区の層序 (B-16区) 南から
 35. 調査区の層序 (C-16区) 南から
- 図版15** 36. 調査区の層序 (C-16区) 東から
 37. 調査区の層序 (C-15区) 東から
- 図版16** 38. 縄文時代草創期の土器
 39. 第V層文化層 細石刃・槍先形尖頭器
 40. 第V層文化層 細部調整剥片・石刃・石核
- 図版17** 41. 第V層文化層 敲石
 42. 第V層文化層 母岩別資料15
 43. 第V層文化層 母岩別資料15接合
- 図版18** 44. 第VI層L文化層 ナイフ形石器・石刃 (母岩別資料5)・細部調整剥片
- 図版19** 45. 第VI層L文化層 母岩別資料6
 46. 第VI層L文化層 母岩別資料6接合

- 図版20** 47. 第VI層L文化層 母岩別資料7
 48. 第VI層L文化層 母岩別資料7接合
 49. 第VII層文化層 母岩別資料7
 50. 第VII層文化層 母岩別資料7接合
- 図版21** 51. D地点 遺跡の現状(南東から)
 52. D地点 遺跡の現状(東から)
- 図版22** 53. 発掘調査風景
 54. 発掘調査風景
- 図版23** 55. D地点 表土を除去した状態(西から)
 56. 発掘調査風景
 57. 発掘調査風景
- 図版24** 58. 発掘調査風景
 59. D地点 遺物出土状態 第VI層上部(東から)
- 図版25** 60. 発掘調査風景
 61. 発掘調査風景
 62. 発掘調査風景
- 図版26** 63. D地点 遺物出土状態 第VI層中部(東から)
 64. ナイフ形石器出土状態(イ区)
- 図版27** 65. 礫出土状態(イ区)北から
 66. 礫出土状態(イ区)南から
- 図版28** 67. D地点 調査区の層序(イ区)東から
 68. D地点 調査区の層序(イ区)南から
 69. D地点 調査区の層序(ロ区)南から
- 図版29** 70. D地点 両面調整石器・槍先形尖頭器
 71. D地点 ナイフ形石器
 72. D地点 石刃
- 図版30** 73. D地点 石刃・石刃状剥片・細部調整剥片・削器
- 図版31** 74. D地点 敲石
- 図版32** 75. D地点 台石

第 I 章 発掘調査の目的と経過

第 1 節 発掘調査に至る経緯

國學院大學文学部考古学研究室では、考古学実習の一環として1979年度から毎年度学術発掘調査を実施している。これまでに新潟県中魚沼郡中里村王遺跡をはじめ、山形県長井市北堂C遺跡、千葉県富津市森山塚古墳、東京都三宅島物見処遺跡の調査を行ってきた。

1987年からは調査地の一つを長野県木曾開田高原に求め、縄文時代草創期の小馬背遺跡、そして西又遺跡の発掘調査を行った。1989年度から現在まで4年次にわたって柳又遺跡A地点の発掘調査を行ってきた。これら一連の調査は、開田高原における旧石器文化ならびに縄文草創期文化の様相とその変遷の解明を目的としたものである。

木曾御岳山の北東麓に位置する開田高原には、旧石器文化および縄文草創期文化の遺跡が多数確認されている。当地における考古学的調査は1911年に東京帝國大學の松村廉が、開田村管沢付近で採集した石鏃を人類学雑誌に紹介したことに始まる。その後、1955年に藤沢宗平ほか信州ローム研究会が行った古屋敷遺跡の発掘では大形の槍先形尖頭器が出土し、それらを主体とする石器文化は「信州ローム」誌上に報告され、旧石器文化と縄文文化起源の研究フィールドとして開田高原の重要性を強く印象づけることになった。それに続いて1959年から4年次にわたり、柳又遺跡調査会による柳又遺跡A地点・B地点の発掘調査が行われ、細石刃やナイフ形石器を伴う複数の旧石器文化、また「柳又ポイント」の通称で知られる有舌尖頭器が層位的に検出され、旧石器文化から縄文文化への様相解明に大きく貢献した。また、その後1968・69年に木曾教育会によって実施された小馬背遺跡、西又遺跡の発掘調査において、隆起線文系土器に伴い、有舌尖頭器・槍先形尖頭器・片刃打製石斧等の縄文時代草創期の石器群が発見され該期の研究の進展に少なからず寄与した。

本学考古学研究室では、このような経緯を踏まえ、開田高原における考古学的調査を継続的に行ってゆく方針を立て、1987年4月に遺跡の分布と現状を把握するための予備的な調査を行い、2年次にわたる小馬背遺跡の調査および西又遺跡の調査に踏み切ったが、両遺跡は既に耕作によって大きく擾乱を受けていることが判明し、両遺跡の調査は1988年度をもって一応の区切りがつけられた。

一方、柳又遺跡については、1979年度の御岳山噴火降灰罹災に伴う土地改良工事や耕作等によって、遺物包含層は既に埋滅したものと考えられてきた。ところが小馬背遺跡の第二次調査と並行して行った周辺遺跡の踏査の際に、柳又遺跡A地点の村上和幸氏所有の畑地に遺物が散乱していたため、ただちに同地点の試掘を行ったところ、旧石器時代の遺物包含層が擾乱を受

けずに遺存していることが判明し、同地点を新たな調査対象とする方針が固められた。

1989年に実施した第1次発掘調査では、旧石器時代の遺物包含層の遺存状態と遺跡の基本層序を確認するとともに、第V層から出土する細石刃を主体とする石器群を特徴とする「第V層文化層」と、第VI層以下で出土するナイフ形石器を伴う石器群を特徴とする「第VI層文化層」と、少なくとも2つの文化層の存在が確認された。

続く1990年に行われた第2次発掘調査では、第V層中で礫群と配石とを各1基ずつ検出するとともに、多数の細石刃関係資料とそれに伴う石器群を得て、より具体的に第V層文化層を把握した。また、第VI層以下で出土するナイフ形石器を伴う第VI層文化層については、礫群1基とその礫群を中心に分布する石器ブロックを確認し、遺物検出の層位的ピークが第VI層中部から下部にあたることをつきとめた。他にはC-7・8区を中心に分布が集中する第IV層出土の石器群を「第IV層文化層」と認定している。そして、これらの文化層それぞれについて石器群の器種組成や石材組成、あるいは切片剥離技術の復元に言及した。

1991年の第3次の発掘は、特に第V層文化層のひろがりに注目して実施された調査である。第2次調査で検出された細石刃文化に伴う礫群は、予想以上のひろがりを示し、合計7基からなる集合体であることが明らかとなった。同文化層では他に配石1基を新たに検出し、同時にその周辺に比較的まとまった細石刃関係資料の分布が把握された。その結果、第V層文化層の分布状況と、その石器群の器種組成や石材組成がより一層明確になった。また、大部分が第I層出土ながら、石器群の特徴の検討を通して第2次調査で新たに設けられた第IV層文化層の石器群を充実させ、層位論的所見に基づいて柳又遺跡A地点における編年の位置づけを試みた。本文化層の石器群は、東北日本における樽岸遺跡等の石器群や御子柴・長者久保文化との編年的関係、系統的関連性のうえで注意され、細石刃文化の終末後、縄文時代への移行過程の研究に重要な資料を提供したといえよう。

前年度の調査である1992年の第4次は、第1次調査～第3次調査において掘り下げられていなかった第VII層以下における遺物包含層の存在を確認することを主な目的として発掘が行われた。第4次調査は天候にも恵まれ順調に第VIII層まで掘り進められ、調査深度は一部第IX層にまで達した。その結果、第VII層上部において礫群2基と3か所の石器ブロックが確認され、新たに「第VII層文化層」とした。また、第2次調査で第VI層中部から下部において確認され、第VI層文化層と呼称していた礫群や石器ブロックとは分布を違えて、第VI層上部から中部にかけ礫群1基と石器ブロックが発見され、「第VI層M文化層」とした。これに伴って従来の第VI層文化層を「第VI層L文化層」と改称した。第VII層下部以下では遺物包含層は確認されなかった。第4次調査は人力で発掘可能な層位を完掘しており、その成果はこれまでの調査成果と合わせ、柳又遺跡A地点における編年としてまとめられた。

なお、第4次調査ではじめて確認された第VII層文化層の礫群2基と石器ブロック3か所は、

いずれも発掘区域の隅に位置しており、発掘区域外へのひろがり予想された。

こうした経緯を踏まえて、今回の第5次調査では、第4次調査で確認された第Ⅶ層文化層の礎群や石器ブロックのひろがりを追跡することを目的に調査計画が練られることになった。特に第4次調査の整理作業の過程で把握された母岩別資料の分布が第4次調査の発掘区域北側にひろがることを考慮して、発掘区域を選定することにした。

ところで、柳又遺跡群にはA地点、B地点、C地点、柳又西遺跡のあることがこれまでに知られている。A地点は本学考古学研究室が過去4年にわたって継続的に発掘調査を行ってきた部分以外に、その西側にあたる部分で1959～1962年にかけて発掘調査が行われたAⅠ地点と呼称されている（樋口・森嶋 1959）。同時にAⅠ地点とはその西側を通る道路を隔ててAⅡ地点の存在が、AⅠ地点の北東約45mにAⅢ地点の存在が指摘されている（樋口・森嶋 1959）。しかしながら現在まで、AⅠ地点の発掘調査の正確な位置は確認されていない。また、AⅡ地点やAⅢ地点は発掘調査が行われたわけではなく、踏査に基づいて把握されたものである。

現在の調査地点については、本学考古学研究室が4年次にわたって継続的に実施してきた調査を経て、文化層の確認と各文化層の編年的見通しが得られたことを受けて、さらに同地点の継続的な調査を行うとともに、柳又遺跡群を構成する遺跡・地点について具体的に把握することを目指して、第5次調査ではAⅡ地点の一部で試掘を行うことを計画した。

1993年5月12日から5月14日まで、本学小林達雄教授と宮尾亨助手が現地に出張し、発掘区域の選定と調査期間等について、関係諸機関ならびにA地点地主村上和幸氏との間で協議を行い、調査期間を9月13日～9月22日までと決定した。

なお、本遺跡の発掘調査にあたっては長野県教育委員会ならびに開田村教育委員会より御指導と御協力をいただいている。地主村上和幸氏には、これまでのすべての調査において格別の御理解と御協力をいただいている。また、AⅡ地点の一部で計画した試掘は、下村喜美代氏の快諾を得て可能になった。あらためて謝意を表したい。

学校法人市邨学園理事長末岡照章先生（73期院友）には、過去6年における開田高原における調査の際と同様に、同学園開田高原研修センターを調査団の宿舎として提供していただいているばかりではなく現地まで激励にお越しいただいた。

巖見旅館、たけみ商店には調査団の食事、宿舎から調査地点までの移動等、さまざまな面で御協力いただいた。

これまでの調査同様に神村透先生・樋口昇一先生・山下生六先生をはじめ、激励に遠路はるばるお越しくくださった見学者各位にも無償の御支援いただいた。

本書を上梓するにあたって、あらためて感謝の意を表する次第である。

（中野）

第2節 第5次調査の概要

(1) 第5次発掘調査の経過

概要

第5次発掘調査は、1993年9月13日から9月22日までの10日間にわたって実施された。今回の調査では、第1次調査～第4次調査の成果である縄文時代草創期前半の文化層、第IV層文化層、第V層文化層、第VI層M文化層、第VI層L文化層、第VII層文化層という6面の文化層の編年の一応の確定を受けて、それらの各文化層の平面的なひろがりをつまえていくことに重点がおかれた。特に第4次調査で確認された第VII層文化層の礫群2基と石器ブロック3か所は、いずれも発掘区隅に位置し、発掘区域外へのひろがり予想されており、重要な課題であった。

そこで第VII層文化層の母岩別資料の分布を参考に発掘区域の選定を行い、第VII層文化層の第2号礫群や石器ブロック2のひろがり予想されるA～C・Z-15・16区8グリット、面積32㎡について発掘調査を行った。さらに地形の傾斜が大きいA～C・Z-15・16区の東方で、層位の遺存状態と遺物分布のひろがりを確認するためにV-16区を試掘した。

発掘はA～C・Z-15・16区では全体に第IX層上部まで行なったが、予想された第VII層文化層の第2号礫群や石器ブロック2のひろがり把握されなかった。他の文化層についても、唯一C-16区を中心に第V層下部から第VI層上部で検出された礫群を第V層文化層第7号礫群として把握したが、石器群の分布はいずれの層位においても散漫で、各文化層の石器ブロックは把握されなかった。また、第4次調査と同様に第VII層以下では遺物は検出されなかった。

試掘のV-16区は第VII層まで掘り下げ、これまで大部分の調査区で削刺され遺存していなかった第V層上部より上位の層位が良好に遺存していることが判明した。V-16区の第II層から縄文土器の破片1点が出土し、縄文時代の包含層の存在が予想された。また、第V層以下でもわずかながら石器や礫が発見されている。これらのV-16区試掘の成果は、第6次調査の発掘区をすでにV-16区を含む範囲と決定しているため、第6次調査報告に一括して掲載する。

第5次調査では、柳又遺跡群を構成する遺跡・地点について具体的に把握することを目指して、A地点の調査と平行してAII地点（樋口・森嶋 1959）の一部（西野6503-3）で、2m×4mの範囲を試掘した。その結果、A地点の基本層序に対応する層位の良好な遺存が確認され、同時にA地点の第V層文化層や第VI層L文化層に対比される石器群が発見された。なお、この試掘地点は、発掘調査によって具体的に把握した地点として、D地点と呼称することとした。

発掘調査は、考古学実習生10名のほか、本学学部、本学大学院や青山学院大学、同大学院、東京女子大学、中央大学、富山大学から特別参加生が加わり、総勢35名によって行なわれた。期間中雨天に見舞われた日があったものの、調査は計画に沿って順調に進められ、所期の目的を達成して終了した。

発掘調査日誌

9月13日(雨時々曇) 本学本館玄関前に集合し、大学のバスに乗車して現地をめざした。

9月14日(雨) 雨天のために初日から作業中止。

9月15日(曇時々晴) A地点では予定通り発掘区を設定し、A・B-15・16区については第1次調査の埋め戻し土を除去。C-15・16区とZ-15・16区、ならびにV-16区は第1層(耕作土)から発掘を開始。また、D地点では試掘区を設定し、発掘を開始。

9月16日(晴) 班編成に基づき、調査グリッドを分担。前日からの発掘を継続する。

9月17日(曇のち雨) 10時頃から雨足が強まり、雨に打たれての作業となった。C-16区で第V層下部から第VI層上部にかけて礫群が検出された。A・B-15・16区の調査深度は第VII層に到達した。雨の合間を縫って、礫群の写真撮影を行う。

9月18日(雨のち曇) C-15・16区ならびにZ-15・16区で第V層出土の遺物について平面分布図作成後取り上げ。A・B-15・16区の調査深度は第VIII層に到達した。19時より宿舎において末岡照章先生と多数の見学者の方々を迎え懇親会を盛大に催す。

9月19日(晴) Z-15・16区の調査深度がA・B-15・16区とならぶ。Z、A・B-15・16区については同日第IX層上部まで完掘。C-15・16区では第VI層出土の遺物取り上げ後、第VII層の発掘に着手。D地点ではA地点の基本層序第VI層に相当する層位で多数の遺物が出土。

9月20日(晴) C-15・16区で第VI層から第VIII層までの精査が急ピッチで行われ、完掘後、調査区壁際を第IX層まで掘り下げて層序を確認。D地点では前日までに出土した多数の遺物について、出土状況を写真と図面に記録し、取り上げを開始。

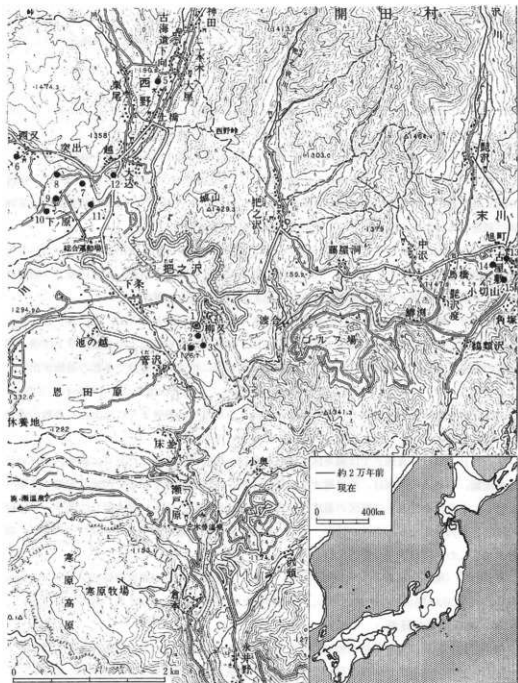
9月21日(晴) A地点では調査区の層序を写真と図面に記録後、ただちに調査区の埋め戻しを開始。D地点の試掘は、第VI層までの精査で終了。出土遺物を写真と図面に記録して取り上げる。それに並行して試掘区の層序を写真と図面に記録し、直ちに埋め戻しに着手。埋め戻しは、日暮れが早くなったこの時期、すでに暗闇に包まれた遺跡のなかで手探りで行われ、宿舎へ帰還した時には20時を過ぎていた。

9月22日(雨) 宿舎として利用させていただいた市郵学園開田高原研修センターの清掃を行い、大学に向け開田高原を後にする。大学到着後、器材を整備して10日間の日程を終了した。

(2) 整理作業の経過

出土遺物の種別作業と遺物台帳の作成を終えた1993年10月20日に整理作業に関する打ち合わせを行い、同日より石器の実測図や遺物分布図の作成、母岩別資料分析、礫分析に着手する。なお、石器62点の実測が終了したのは1995年2月6日である。石器の実測図や遺物の分布図等の作成と並行して、報告書の割付作業を行い、1995年2月24日に執筆分担と版下作成等の編集作業の分担を定めた。その後、作業は断続的なものとなったため、1996年1月12日までの月日を費やした。入稿は同日行ない、校了は3月13日である。

(津田・中野)



1. 柳又遺跡A地点 2. 柳又遺跡C地点 3. 柳又遺跡B地点 4. 柳又西遺跡 5. 小馬骨遺跡
 6. 西又II遺跡 7. 下ノ原1遺跡 8. 下ノ原2遺跡 9. 下ノ原3遺跡 10. 下ノ原4遺跡
 11. 下ノ原5遺跡 12. 越前遺跡 13. 古屋敷遺跡A地点 14. 古屋敷遺跡B地点 15. 古屋敷遺跡C地点

第1図 柳又遺跡群の位置と周辺の遺跡 (1/5000)

第II章 開田高原と柳又遺跡

第1節 柳又遺跡の位置と地理的環境

(1) 柳又遺跡群の位置と地理的環境

開田高原は御岳山の北東麓に位置する平均標高約1100mの高地性盆地である。高原には西野川が北から南へと貫流し、この地域を東西に分けている。その西側は、西野川支流の冷川により、さらに南北へと二分されており、北側を下の原、南側を恩田原といい、この恩田原の東北隅の一角が柳又原と呼ばれている。柳又遺跡群は西野川右岸に形成された河成段丘の崖線付近に立地している(第1図)。遺跡群はA地点・B地点・C地点そして柳又西遺跡からなり、時期的にも相互に関連性が高いと考えられている。A地点はこの崖線から西に75mを隔てた台地上に位置している。標高は1123.900m(最高点)で、西野川の現河床面との比高差は約70mである。なお、C地点はA地点の約90m南方、同じくA地点南方150mにはB地点があり、B地点とは小さな沢を隔てて、その西方の台地上が柳又西遺跡である。

開田高原の西方にある御岳山は、それぞれ数万年程度の期間をもちながら、古期・新期という2回の活動期と静穏期を交互に繰り返しており、現在は2回目の静穏期にあたると思われる。古期で1回(第1期)、新期に3回(第2～4期)の合わせて4期の活動期が認められている。これらの活動期に噴出された火山噴出物が御岳テフラ層であり、下位から順に、古期御岳テフラ層・新期御岳下部テフラ層・新期御岳中部テフラ層・新期御岳上部テフラ層と区別することが提唱されている(小林ほか 1977)。新期の各火山活動期に起源するテフラ層は、関東地方におけるテフラ層との対比が試みられており、再検討の余地があるものの、第2～第3期が下末吉ローム期、第4期が武蔵野ローム期～立川ローム期に相当するとされる(小林ほか 1977、竹本ほか 1987)。なお、遺跡が形成された木曾谷の第4期河成段丘面である坂下面には、新期御岳上部テフラが堆積している。このテフラの鍵層として、下位から木曾川泥流・御岳第2スコリア層・開田キャンプ場火砕流というテフラ層を挙げることができ、これらの堆積物から坂下面の形成年代は約3万～2万5千年前に求めることができる(竹本ほか 1987)。また、開田キャンプ場火砕流の上位には始良Tn火山灰が含まれている。(新生)

(2) 周辺の遺跡

柳又遺跡群をはじめとして、開田村内では現在までに48遺跡の存在が確認されているが(文化庁編 1983、神村・山下 1986)、時期的には旧石器時代から縄文時代前期までの各期に属するものが多い。

ナイフ形石器を主体とする石器群は、柳又遺跡A地点・B地点・C地点、下の原遺跡A地点、

古屋敷遺跡C地点の各遺跡で出土している。柳又遺跡C地点で検出されたナイフ形石器を伴う3面の文化層のうち、最下層の文化層は角錐状石器・切出形石器を特徴的に伴い、開田高原における最古の旧石器文化として位置づけることができる。また、1959年～62年にかけて行われた発掘調査では、柳又遺跡A地点・B地点から出土したナイフ形石器を伴う石器群を、それぞれAⅠ群・BⅠ群という仮称で分類している。この後、調査者樋口昇一らは、AⅠ群を編年的に古く位置付けている(樋口・森嶋・小林1965)が、AⅠ群には両面調整の槍先形尖頭器が共存していることから、編年的位置づけは、ナイフ形石器文化の後半に求められる。

また、1990年に村道2-8号線の付け替え工事に伴い発掘調査が行われた柳又遺跡C地点からも、ナイフ形石器を伴う3面の文化層が層的に検出され、開田高原におけるナイフ形石器文化の編年に関して重要な資料が提供されている。それらの文化層の中で最下層位から出土した一群は、角錐状石器や切出形石器を伴う特徴的な石器群であり、現段階においては開田高原における最古の旧石器文化として位置づけられるものであり、A地点における第Ⅶ層文化層に対比されるものである。上位層からはナイフ形石器を伴って、両面調整・片面調整を含む多数の槍先形尖頭器・拇指状搔器等が出土している(青木・内川・高橋 1993)が、樋口昇一らのいうAⅠ群やBⅠ群の石器群よりも後出の段階に属する、ナイフ形石器文化の最終段階に位置づけられている。

旧石器時代終末期の細石刃文化については、柳又遺跡A地点・C地点でそれぞれまとまった資料が得られている。A地点の細石刃文化は、削片系を含む楔形細石刃核に特徴づけられるものであり、湧別技法と共通する北方系の細石刃剥離技法を持つ。北方系の細石刃文化は、開田村の西北に隣接する、岐阜県大野郡高根村日和田高原の池の原遺跡B地点にもみることができ(高根村史編集委員会 1984、麻生ほか 1991)。その一方で、C地点からは非削片系の細石刃核に特色づけられる細石刃石器群が出土しており、開田高原一帯には2つの異なる系統をもつ細石刃文化が展開していたことが明らかである。なお、編年的には前者が古くなることが指摘されている(谷口 1991)。

古屋敷遺跡A地点で発見されている大形の槍先形尖頭器を主体とする石器群は、その編年的位置づけを旧石器時代終末から縄文時代への移行過程に位置づけられる神子柴・長者久保文化の前後に求められるであろうが、石器器種組成や土器の共存関係等に不明な点を残している(藤沢・小林 1956、藤沢ほか 1956)。柳又遺跡A地点における本学考古学研究室の実施した第2次調査と第3次調査で確認された両面調整の槍先形尖頭器と大形の石刃を素材とする彫器・削器などで構成される第Ⅴ層文化層もまた、層位的検討から細石刃文化の第Ⅴ層文化層と縄文時代草創期前半の文化層の間に位置づけられ、旧石器時代終末から縄文時代への移行過程におけるもう一つの文化として、古屋敷遺跡A地点に見られるような神子柴・長者久保系の文化との関連が注意される。

有舌尖頭器を主体とする石器群は、柳又遺跡A地点・B地点、小馬背遺跡、西又遺跡で確認されており、縄文時代草創期前半に位置づけられる隆起線文系土器との共伴が報じられている。有舌尖頭器は、各遺跡によって形態組成に変化があるものの、いずれも柳又ポイントの範疇に含まれるものである。開田高原では有舌尖頭器を伴い隆起線文系土器の出土する遺跡は多いが、編年的に隆起線文系土器に続く爪形文系土器、円孔文系土器、多縄文系土器を出土する縄文時代草創期後半の遺跡は未だ発見されていない。

縄文時代早期以降の遺跡には、早期中葉に位置づけられる押型文系土器を出土する大原遺跡、早期後葉～末葉に位置づけられる条痕文系土器が出土する古屋敷遺跡A地点・管沢遺跡がある。また、管沢遺跡では前期前半に位置づけられる有尾式土器の出土する竪穴住居跡が発掘されている。その後、続く縄文時代中期以降の遺跡は極めて少なく、断片的な資料が散見されるだけである。

(新田)

第2節 第5次発掘調査

(1) 発掘調査区域の設定

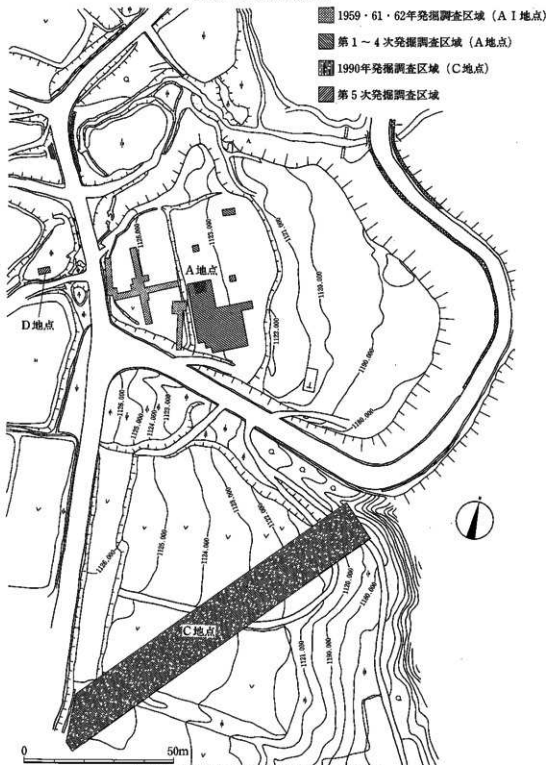
第5次発掘調査は、第4次調査でとりまとめられた縄文時代草創期前半の文化層、第IV層文化層、第V層文化層、第VI層M文化層、第VI層L文化層、第VII層文化層という6面の文化層の編年の暫定的な把握のもとに、それらの各文化層の平面的なひろがりをつまえていくことに重点をおき、第VII層文化層の母岩別資料の分布を参考に、第VII層文化層の第2号礫群や石器ブロック2のひろがりが続くと予想されるA～C・Z-15・16区8グリット、面積32㎡について発掘調査区域を設定した(第2・3図)。同時に地形の傾斜が大きいA～C・Z-15・16区の東方で、層位の遺存状態と遺物分布のひろがりを確認するためにV-16区、面積4㎡の試掘グリッドを設けた。

発掘調査区域としたA～C・Z-15・16区のうち、C-15・16区とZ-15・16区は、これまで調査対象にされておらず、はじめての調査であるが、A・B-15・16区は第1次調査で第VI層上部まで発掘が行われている。また、試掘のために設定したV-16区は今回はじめて調査されるグリッドである。

なお、V-16区は第VII層まで掘り下げ、これまで大部分の調査区で削剝され遺存していなかった第V層上部より上位の層位が良好に遺存していることが判明するとともに、遺物も出土しているが、今回の試掘成果に基づいて発掘区域を選定した第6次調査報告書にまとめて掲載する方針をとり、本報告書には提示していない。

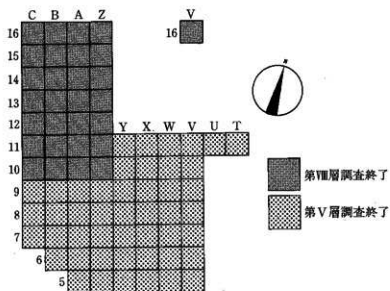
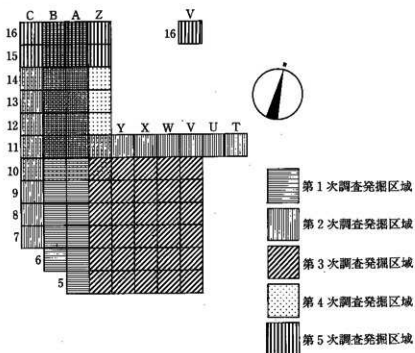
発掘調査区の設定に際しては、第1次～第4次調査と同様に、磁北に対してN-12°23'25"-Eの傾斜をとる南北の軸と、直交するように定めた東西の軸にしたがった。標高原点もまた

第II章 棚田高原と柳又遺跡



第2図 遺跡周辺の地形と発掘調査区域 (1/1250)

第2節 第5次発掘調査



第3図 発掘調査区域と調査層位

これまでと同じく、A地点の立地する台地の西端部に施設されている水準点(標高1125.700m)から遺跡内に原点移動し、標高1122.700mで設置した。

第1次から第5次調査までの発掘調査区域と調査終了層位は、以下のとおりである(第3図)。第1次調査ではA・B-5~16区とA-22区の24グリッド(面積96㎡)。第2次調査ではA・B-10~14、C-7~14、Z~T-11、T・U-28区の27グリッド(面積108㎡)。第3次調査ではZ~V-5~10区の30グリッド(面積120㎡)。第4次調査ではA~C、Z-10~14区の20グリッド(面積80㎡)。これらの調査区域は、いずれも第V層まで発掘が終了している。また、第4次調査の発掘区域であるA~C、Z-10~14区に限っては、第VIII層まで発掘されている。

(2) 基本層序

本遺跡の基本層序は、第1次調査で確認したA-22区と第2次調査で確認したA-10区とで土層観察したものに基づいており、以下に示すとおりである(第4図)。

第I層：表土(耕作土)。層厚約20~30cm。

第II層：黒褐色土層。白色粒子を微量に含む。層厚はA-22区で約15cm。

第III層：暗茶褐色土層。白色粒子を多量に含む、下部には青灰色スコリアを含む。層厚はA-22区で約20cm。

第IV層：暗褐色土層。第III層と第V層の漸移層である。白色粒子と赤色・青色スコリア(径2~3mm)を多量に含む。層厚はA-22区で約10cm。

第V層：暗黄褐色のソフトローム層。第IV層より小粒の赤色、青色、白色スコリアを含む。色調は下半部がより明るい。層厚はA-22区で約10cm。

第VI層：暗黄褐色のハードローム層。スコリア(径10~15mm)を多量に含む、赤色スコリアは第V層に比べて大きい。部分的にクラック帯が認められる。層厚はA-22区で約60cm。A-10区で約20cmである。A-22区では、この層の中位に固くしまった青灰色スコリアの密集帯が挟まれており、上下に分層することができる。この場合には、上部を第VI Upper層、下部を第VI Lower層とする。ただし、台地上部平坦部分にあたるA・B-10~14区では、このスコリア密集帯は認められず、分層することはできない。

第VII層：明黄白色のハードローム層。青灰色スコリア(径1~5mm)を多量に含む。第VI層よりも色調が明るく、粘性があり軟質である。層厚はA-10区で約10cmである。

第VIII層：スコリアを多量に含むローム層。第VII層と第IX層の漸移層。赤色・青色・青灰色スコリア(径1~8mm)を多量に含む、堅く締まる。A-10区で約30cmである。

第IX層：層厚は約120~150cmのスコリア堆積層。性状と層厚から判断して御岳第2スコリア層[S-2](木曾谷第四期研究グループ 1967)に同定される。非常に固く、A-10区では約40cmを掘り下げたに過ぎないが、最上部は次の二層に細分される。

第IX a層：細粒の青灰色スコリア（径1～10mm）を主体として、赤色スコリア（径1～8mm）と微量の白色スコリア（径1～4mm）を含む。層厚は約20cm。

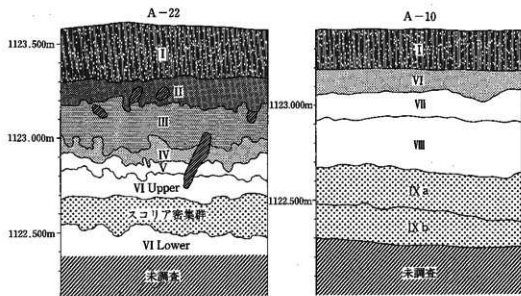
第IX b層：赤色スコリア（径1～15mm）を主体として、青灰色・白色スコリア（径3～15mm）を含む。層厚は約20cm。

(3) 遺跡の地形と調査区層序

西野川に開析され、比高差約50mの急峻な崖線が形成された台地は、西から東に流れる沢と小規模な谷によって南北が区画され、東方に舌状に張り出している。遺跡はこの舌状部分に位置し、その現地地形は西から東に緩やかに傾斜している。

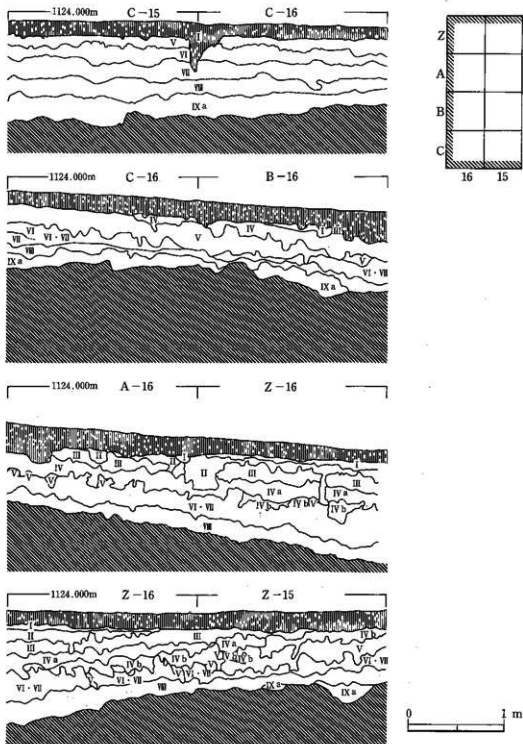
発掘区域A-C、Z-15・16区の層序（第5図）は、西から東に向かって大きく傾斜し、C-16区とZ-16区ではおよそ90cmの比高差をもっている。特にB・Z-15・16区では東西方向の傾斜が大きくなると同時に、南から北に向かっても東西方向よりは緩やかながら傾斜し、比高差およそ40cmを示す。つまり、今回の調査区では南西から北東に向かって傾斜していく状況が把握できるのである。B・Z-15・16区では各層位の厚さが一定しなくなり、第V層がブロック状にしか観察できず、一部存在していない場合もある。また、第VI層と第VII層は調査区北面と東面とでは混じり合い分層できない。しかし、第VIII層は傾斜しているものの安定して確認できる。畢竟、第VII層から第V層までの堆積は、地形の傾斜の著しい部分で安定せず、これらの層位に含まれる遺物がプライマリーなものではない可能性を示している。

一方、第V層上部より上位の層位は、これまでの調査区では削削されている場合が多かった



第4図 遺跡の基本層序 (1/20)

第二章 開田高原と柳又遺跡



第5図 発掘調査区の層序 (1/40)

が、今回の調査区では第IV層が一部遺存していた。特にZ-15・16区の北面ならびに東面では、第IV層が安定した状態で観察され、以下に示した二層がさらに細分された。

第IV a層：暗褐色土層。第IV b層に比べて全体に暗い色調を呈する。青灰色スコリア（径1～5mm）を多量に含む。Z-15区で層厚約15cmを測る。

第IV b層：暗褐色土層。白色粒子を多量に含む、全体に明るい色調を呈する。Z-15区で層厚約12cmを測る。

また、B・Z-16区では自然堆積した表土層が残存していた。層序を示した挿図（第5図）ではスクリーントーンで耕作土の第I層を指示し、表土層である第I層と区別した。

(4) 出土遺物の概要

発掘調査区域A～C・Z-15・16区では全体を第IX層上部まで精査したが、第4次調査で確認されたC-14区を中心にひろがる第VII層文化層第2号礫群や第VII層文化層石器ブロック2の続きは予想に反して認められなかった。

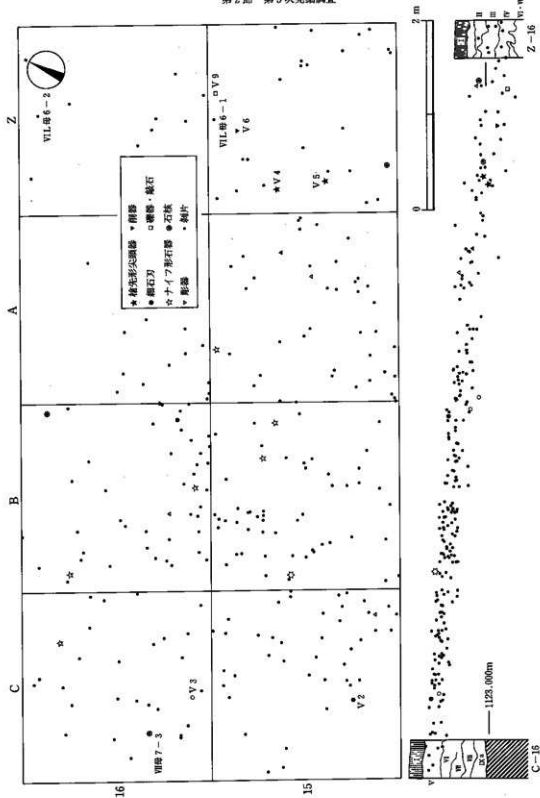
今回発掘を行った調査区域全般にわたり、いずれの層位においても礫や石器の分布は散漫であり、過去4次にわたる調査区域と比較して数量的に出土遺物が少なかった（第6図）。その結果、各文化層とも石器ブロックは把握されていない。

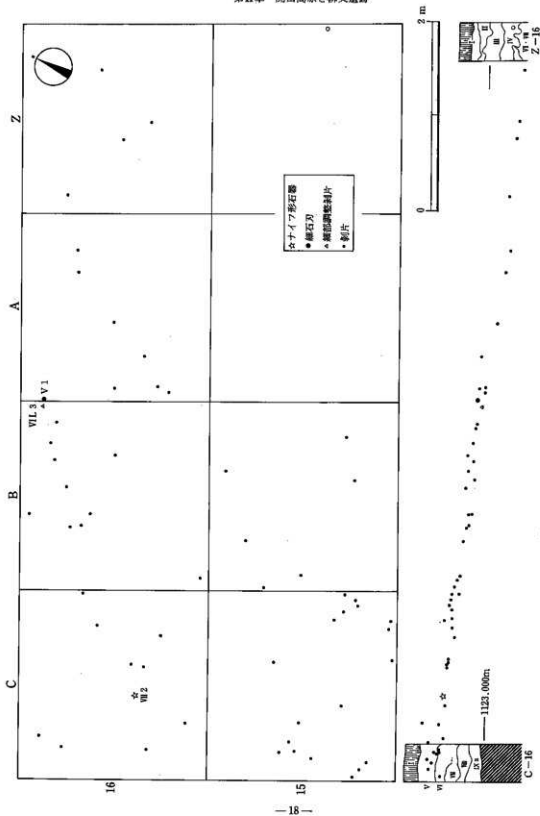
唯一、C-15・16区を中心とする礫のまとまりが検出された。この礫のまとまりは、第V層下部から第VI層上部にかけて特に集中しており、「第V層文化層第7号礫群」として把握したが、明確に礫群の範囲を特定できないような鮮明な分布を平面・垂直とも示している（第13図）。同層位中の礫の分布は、現地形の傾斜にはほぼ一致する傾斜をもってA・B、Z-15・16区に統しているが、礫の接合が集中する箇所（第15図）を礫群として一応捉えることにした。

前述のようにいずれの層位においても石器ブロックは把握できなかったが、出土層位（第7～9図）と個々の石器の観察と母岩別資料分析に基づいて、出土石器の文化層を認定した。

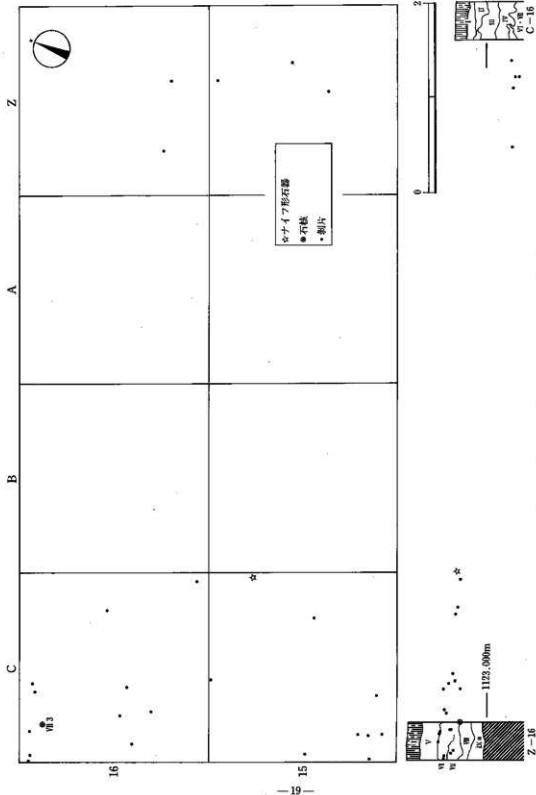
第V層文化層として把握した石器群には、細石刃2点、槍先形尖頭器2点、削器2点、石刃状剥片1点、石核1点、敲石1点と剥片・碎片95点の合計104点がある。また、第VI層L文化層に帰属する石器には、ナイフ形石器3点、石刃1点、石核1点、細部調整剥片2点と剥片・碎片60点の合わせて67点がある。今回の調査で最も注目された第VII層文化層の石器群には、ナイフ形石器1点、石核2点と剥片・碎片27点の合計30点があるが、第4次調査の出土点数と比べると色褪せる結果である。なお、第4次調査と同様に第VII層下部以下では、遺物は検出されていない。また、第VI層M文化層に該当する石器群は出土層位の検討に加え、母岩別資料分析を試みた結果としても確認できなかった。

試掘を行ったV-16区は、第VII層まで掘り下げて各層位で精査を行った。これまで大部分の調査区で削割され遺存していなかった第V層上部より上位の層位が良好に遺存していることが判明し、第II層から縄文土器の破片1点が出土し、当該区域に縄文時代の包含層の存在が予想





第8図 第VI層出土の石器 器種別分布状態 (1/40)



第8図 第VII層出土の石器 器種別分布状態 (1/40)

された。また、旧石器時代の文化層の存在する第V層以下でもわずかながら石器や礫が検出された。これらV-16区試掘の成果は、この成果を基に発掘区域を設定した第6次調査報告で一括して掲載することにし、第5次調査報告書では扱っていない。(新田)

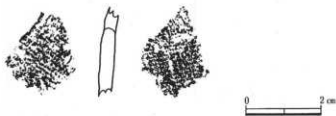
(5) 表面採集資料

今回の調査では、土器破片1点を表面採集している(第10図)。

無文の胴部破片であるが、表面は風化しており、遺存状態が良くないため調整痕などの観察はできない。器体内面には器面調整の結果と思われる右斜する擦痕が観察される。器厚は4mm足らずで薄手であるが、断面には輪積痕が一か所見られる。胎土には砂粒が少量混入されており、また繊維痕が見られる。

本学考古学研究室の実施してきた柳又遺跡A地点における四年次におわたる調査では縄文土器の発見はわずかなもので、草創期前半の隆起線文系土器(永峯・谷口編 1993)と、早期前葉～中葉の押型文土器(小林編 1990)があるに過ぎない。これは本遺跡の縄文時代の遺物包含層が、耕作等によって削削されていることが影響しているものと考えられよう。なお、過去の柳又遺跡A地点における調査では、早期末葉～前期初頭の粕知式・木島式土器(森嶋 1959)の出土が報告されている。また、柳又遺跡B地点でも隆起線文系土器や前期の土器(樋口 1961)の出土が報告されている。

本資料は無文の胴部小破片であり、詳細な編年の位置を定めることは難しい。しかし、器厚が4mmと薄手で、同時に繊維が混入されていることから、前期前葉以前であることは間違いない。ただし、早期後半の条痕文系土器や前期前葉の羽状縄文系土器のように多量の繊維が混入されている訳ではなく、また第1次調査で出土した早期前葉～中葉の押型文土器と比較した場合、押型文土器は器厚が5～9mmとより厚手であり、胎土には金雲母や粗粒子が混入されており(小林編 1990)、本資料とは特徴が異なる。本資料に最も類似する資料は、器厚や内面の擦痕等が共通する第3次調査で発見された隆起線文系土器である。ちなみにB地点出土の土器の中には動物性繊維を器面に押し付けたとみられるものがある(小林 1966)。本資料の胎土に見られる繊維痕もあるいは動物性繊維によるものかもしれないが、断定するにだけの根拠は得られていない。(中野)



第10図 縄文時代の土器 (1/1)

第三章 第V層文化層

第1節 概要

第V層文化層は、旧石器時代終末期に位置づけられる細石刃文化の石器群である。第1次調査～第5次調査で既発掘区域は76グリッド、面積304㎡に達しており、ソフトローム層である第V層を中心に石器577点を含む3274点の石器群と、礫群8基・配石2基が発見されている。

細石刃およびその関係資料は合計321点あり、細石刃剥離工程のあらゆる段階の資料を含んでいる。特筆すべき点には、非削片系の細石刃石核と削片系の細石刃石核とが同一の層位から出土していることが挙げられる。それは、一般に野岳休場型石核をはじめとする非削片系の細石刃石核を用いた細石刃剥離技術が主流を占める中部地方南部で、湧別技法に代表される北方系の細石刃文化と技術の関連を示す削片系の細石刃剥離技術の存在が確認されたことにより、中部地方における細石刃文化の編年と系統に重要な問題を提起したといえる(谷口 1991、永峯・谷口編 1993)。

また、過去5年次の調査による資料の増加と蓄積によって、細石刃に伴う石器の器種組成が、明確に把握されてきたが、器種組成上で注目すべきは彫器が少ない点で、一般に削片系の細石刃石核に伴う場合の多い荒屋型彫器が欠落している点は特に注意される。

第V層文化層の遺構には、第3次調査までに礫群7基と配石2基が確認されている。7基の礫群は石器群の希薄なV-Y-7～11区に列状に検出されているが、単位礫群は比較的小形の礫が密集した状態で構成されており、構成礫は被熱し破砕状態を呈したものが多く、このような構成礫の状態から考えて礫群は、調理用の炉の一種とみなされている(永峯・谷口編 1993)。礫群に対して配石は、C-10・11区とV・W-5・6区とで個々に確認されており、礫群とは明らかに配置が異なっている。それぞれ大形の礫が楕円状に配置されており、構成礫は被熱しておらず破砕もみられない。細石刃とその関係資料が配石付近に集中していることから、細石刃剥離作業との関連が類推されている(永峯・谷口編 1993)。

今回の第5次調査では、第V層文化層の層準である第V層について、新たに4グリッド、面積16㎡を追加した。その結果、槍先形尖頭器2点、細石刃2点、削器2点、石刃状剥片1点、石核1点、敲石1点、剥片・砕片95点と礫132点が得られた。遺構には、C-15・16区で南北50cm×東西2mほどにひろがる礫群1基がある。検出層位は第V層下部であることから「第V層文化層第7号礫群」とした。その一方で、明確に礫群の範囲を特定できないような不鮮明な分布を示す礫が現地形の傾斜にほぼ一致してA・B、Z-15・16区に続いて出土していることが注意される。

(角田)

第2節 遺物分布状況

(1) 分布状態

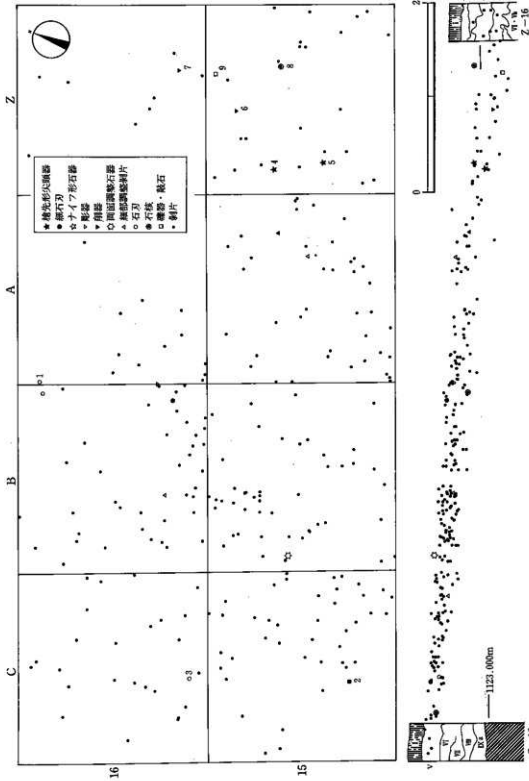
今回の調査ではA～C・Z-15・16区を発掘し、第V層文化層の層準である第V層については、新たにC-15・16区、Z-15・16区の4グリッド、面積16㎡の成果が加わった。その結果、槍先形尖頭器2点、細石刃2点、削器2点、石刃状剥片1点、石核1点、敲石1点、剥片・碎片95点の合計104点の石器を得た。しかし、石器群の分布は希薄であり、石器ブロックとなるような集中する出土状況は認められなかった(第11図)。第1次調査において発掘されたA・B-15・16区の第V層文化層の石器群を併せ、今回の発掘区域A～C・Z-15・16区における石器群の分布状態を見ても、石器群のまとまる傾向は認められなかった(第11図)。過去4年間に把握された母岩別資料と総合して見た母岩別資料分析を通して得られた接合資料は一例のみで、母岩別資料分析のうえからも石器群の分布が希薄なことが追認される(第18図)。

礫は132点出土しており、B・C-15・16区にひろがる礫群I基(第7号礫群)がある(第12・13図)。しかし、出土礫全体を見ると第7号礫群と明確に区分できないような不鮮明な分布を示して、A・B、Z-15・16区にひろがっている(第13図)。これらを重量別に見ると、礫群以外にA-15区やA-16区、Z-16区北東隅にも重量1000g程度の大形礫を含むの小規模なまとまりがある(第14図)。第7号礫群も重量1000g程度の大形礫を含むものの、構成礫はむしろ小形なものが多い(第14図)。今回の調査では、接合関係が集中することをもって第7号礫群を把握した(第15図)。ただし、被熱礫は第7号礫群には少なく、むしろA-15区やB-15・16区の大形礫の小規模なまとまりに多い(第14図)。これらの大形礫の小規模なまとまりについても、被熱状況を考慮すれば、礫群と認定される余地が残されている。

(2) 検出層位

第1次～第3次調査報告において、第V層文化層の生活面は第V層下部～第VI層最上部に指定されている。今回調査されたA～C・Z-15・16区では、第1次調査で第V層が発掘されたA・B-15・16区を含めて、第IV層以下の層位が確認されているが、現地形の傾斜が大きくなるB・Z-15・16区では第V層がブロック状に確認されるか、もしくは存在せず不安定な堆積状態を示している。第V層文化層に帰属する石器群の出土層位は、第V層のほかには第IV層と、分層できなかった第V・VI層にわたっているが、全104点の出土層位別の内訳は、第I層出土1点、第IV層出土3点、第V層出土99点、第VI層出土1点で、第V層に遺物出土のピークがあり、第V層文化層に認定して妥当であろう。

また、第7号礫群の構築面は、第V層下部ないし第VI層最上部に求められる。礫群として把握しなかった礫もまた、地形の傾斜に一致するように傾斜して分布しているものと同層準に位置しており、第V層文化層への帰属は、妥当な見解といえよう。



第11図 第V層文化層の石器 器種別分布状態 (1/40)

(3) 第7号礫群

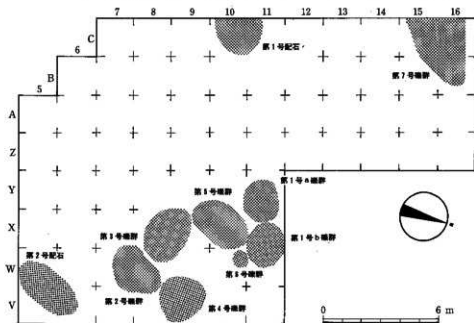
〈位置〉

第7号礫群は、B・C-15・16区に位置する。第2次調査と第3次調査で確認された第V層文化層の他の礫群は、V~Y-7~11区に密集して存在している。それらの礫群相互は、南東-北西の軸線上で二列に配置されたような関係にある。すなわち、第2号礫群-第3号礫群-第5号礫群-第1号a礫群がなす南東-北西の軸と第4号礫群-第6号礫群-第1号b礫群がなす南東-北西の軸である。第7号礫群は、第2号礫群-第3号礫群-第5号礫群-第1号a礫群がならぶ列の北西方向への延長線上に位置するが、それらの密集する礫群の最北西にあたる第1号a礫群との間に約10mの間隔をもち、孤立するように存在する(第12・13図)。なお、当該文化層の石器群の分布と比較した場合、第7号礫群に限らず、いずれの礫群も石器群の分布が希薄な部分に位置し、石器群とは排他的な関係が推定される。

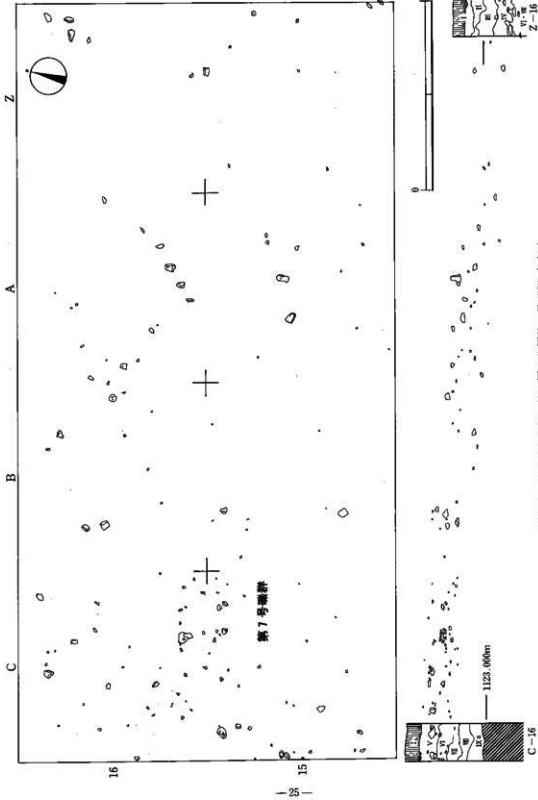
ところで、これらの礫群がならぶ南東-北西の軸線は、調査区の層序に見られた南西から北東に向かって傾斜していく地形に対して直交しており、谷への落ち際の傾斜の緩やかな場所を選んで、礫群が形成された可能性を示している。また、第VI層L文化層の礫群や第VII層文化層の礫群と存在する位置を比較すると、文化層が新しくなるにしたがって平坦地から傾斜地へ、台地奥から谷への落ち際に礫群の形成場所の移動していく状況が窺える。

〈規模と形状〉

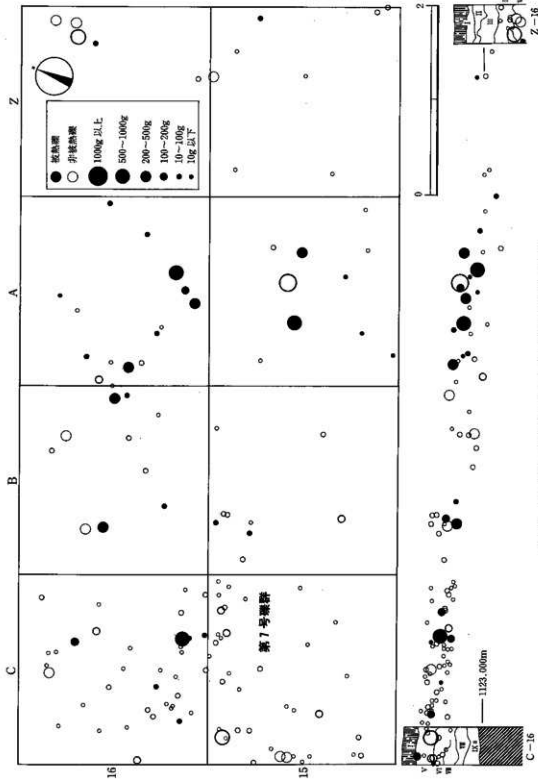
B・C-15・16区で東西方向に約3m、南北方向に約2mの不整な楕円形状に散漫に分布す



第12図 第V層文化層における遺構の配置 (1/200)

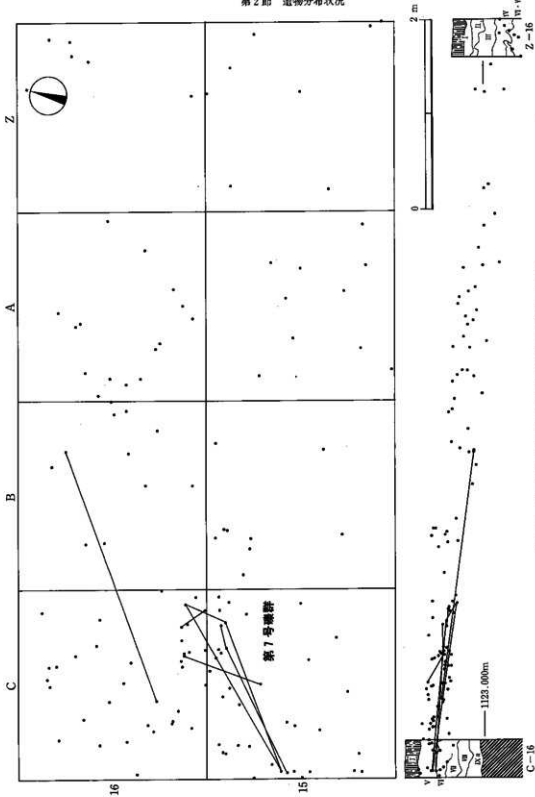


第13図 礎の分布状況と第V層文化層第7号礎群 (1/40)



第14図 殻の重量・焼熱状態と第五層文化層第7号群 (I/40)

第2節 遺物分布状況



第15図 濠の統合関係と第V層文化層第7号遺群 (1/40)

る礫で構成される。第V層下部から第VI層最上部に分布し、垂直方向に約10cmの幅がある。

構成礫54点、総重量3622.77g、平均重量67.09g（第14図）。

しかし、第V層文化層に帰属する出土礫は、第7号礫群と明確に区分できないような不鮮明な分布を示して、A・B、Z-15・16区にもひろがっている。これらを重量別に見ると、礫群以外でもA-15区やA-16区、Z-16区北東隅に大形礫の小規模なまとまりがある。第7号礫群も大形礫を含むものの、構成礫はむしろ小形な破砕礫が多い。今回の調査では、接合関係が集中することをもって第7号礫群を把握したが、被熱礫は第7号礫群には少なく、むしろA-15区やB-15・16区の大形礫の小規模なまとまりに多いことが注意される。礫群として把握しなかった礫は、第7号礫群と同層準に分布しているものの、地形の傾斜に一致した分布を示しており、前述した礫群の位置と遺跡の地形を考慮すれば、比較的平坦な場所に形成された礫群の構成礫が傾斜地に流れて散乱した可能性が考えられよう。

〈構成礫の石材〉

石材別内訳は、チャート31点（57.4%）、砂岩8点（14.8%）、安山岩11点（20.4%）、その他の石材4点（7.4%）で、チャートが圧倒的に多い。一方、石材別の総重量は、チャート188.31g（5.2%）、砂岩109.05g（3.0%）、安山岩3082.91g（85.1%）、その他の石材で242.5g（6.7%）となり、チャートの礫は点数に比して少量であり、破砕した小破片であることが明らかである。実際、チャートにおける破砕礫の比率は、53点中31点（58.5%）と高い。同様に砂岩も点数の割合に比して総重量は少ない。総重量で突出する安山岩は、1000g程度の完形礫1点を含むほか、比較的大形の破砕礫が多く、構成礫の主体が安山岩の礫であったことが窺われる。

〈構成礫の遺存状態〉

遺存状態により、構成礫を次のA～Eの5つに分類した。

A：完形 B～E：破砕礫（B：3/4以上残 C：1/2程度残 D：1/4程度残 E：小破片）

Aが1点（1.9%）、Bが3点（5.6%）、Cが1点（1.9%）、Dが3点（5.6%）、Eが46点（85.2%）で、破砕礫の小破片が圧倒的多数を占めるが、完形の安山岩（遺存状態A）1点も含まれている。なお、完形の安山岩は礫群の範囲のほぼ中央に位置しており、礫群の形成に何らかの役割を担っていた可能性が示唆される。

〈構成礫の被熱状態〉

構成礫54点のうち、完形礫1点、破砕礫4点の合計5点（9.3%）に被熱による赤色変化が認められる。また、このうち2点には油脂状の黒色付着物が認められている。これまでに確認された第V層文化層の礫群に比べて、礫群を構成する被熱礫の比率が極めて低い。

〈構成礫の接合関係〉

接合の集中する部分を礫群と認定したが、特に礫群の範囲としたほぼ中央にあたるC-15区とC-16区の境界付近に接合する礫は集中し、礫群の範囲全体で見た場合、接合関係は散漫で

ある(第15図)。なお、少数の接合関係はいずれも南西-北東方向に破碎した礫に見られ、南西-北東に傾斜する遺跡の地形に沿ったものである。これは前述したように、礫群の範囲に含めなかったA・B、Z-15・16区にひろがる礫が、比較的平坦な場所に形成された第7号礫群を本来は構成しており、傾斜地に流れて散乱したことを傍証する状況であろう。

第7号礫群の構成礫、あるいはA・B、Z-15・16区にひろがる礫は、当該文化層の礫群、あるいは前後の文化層の礫群のいずれとも接合しない。これは第2次調査および第3次調査で確認された第V層文化層の礫群間の接合や、第4次調査で明らかになった第V層文化層、第VI層L文化層、第VII層文化層、それぞれに帰属する礫群の構成礫が文化層を越えて接合する事実と明らかに異なる様相である。当該文化層の礫群のなかで第7号礫群の形成位置が離れている事実とともに、第7号礫群の孤立を窺わせる。

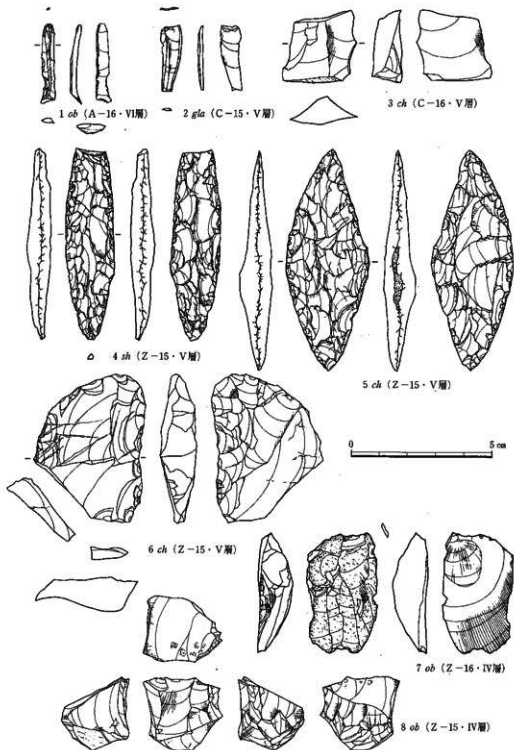
〈比較と検討〉

過去に報告されている、X-Y-7-11区に密集する第1号a礫群、第1号b礫群、第2号礫群、第3号礫群、第4号礫群、第5号礫群、第6号礫群の7基の礫群と第7号礫群とは、構成礫の石材や遺存状態は類似するが、その一方で構成礫の被熱状態や接合関係が大きく異なる。X-Y-7-11区に密集する礫群は、第1号a礫群と第1号b礫群を除き、概ね90%以上の高い割合で被熱による赤色変化が認められるのに対して、第7号礫群は9.2%という低い割合に過ぎない。前述したように礫群の範囲に含めなかったA・B、Z-15・16区に分布する礫を第7号礫群の構成礫と考えると、その傾向はそれほど変わらない。また、第7号礫群以外は、集中の程度に多少の差があるものの、礫群全体に接合関係を捉えることができるが、第7号礫群の接合関係は礫群の範囲、あるいは礫群の構成礫が流れ散乱したと仮定できるA・B、Z-15・16区を含めた範囲に接合関係が集中することはない。

第7号礫群は100g以下の構成礫が87%を占め、構成礫の遺存状態が低い。また、構成礫の分布密度が散漫であることから「破損が著しく進んだ礫群」(辻本 1987)と、あるいは構成礫の被熱率が低いことから「廃棄された状態の礫群」(金山 1987)と捉えることができよう。ただし、細石刃文化に伴う礫群の特徴には構成礫の数が少なく、火熱を受けた痕跡が認められないものがみられるという傾向が把握されている点(辻本 1984)も第7号礫群が帰属する文化層が細石刃を主体とする文化層であることを考慮すれば、看過できない指摘である。本遺跡では第7号礫群には、この指摘されている傾向を適用できるが、他の礫群はむしろ反対の傾向を示している。本遺跡は各年次で部分的な発掘を継続的に実施しており、これまでに公表してきた成果は調査途上のものである。今後も第V層文化層に帰属する礫群の追加に努め、同時にこれまで第V層文化層の礫群と認定しているものについても検証していく必要がある。

(新田)

第三章 第V層文化層



第16図 第V層文化層の石器：細石刃・槍先形尖頭器・明器・石刃状剥片・石核 (3/4)

第3節 石器

(1) 石器

第V層文化層の石器は合計9点ある。その器種別内訳は、槍先形尖頭器2点、細石刃2点、削器2点、石刃状剥片1点、石核1点、敲石1点である。本文中の石器番号は石器実測図（第16・17図）の通り番号を示す。図示した石器の出土位置・計測値等のデータは、巻末の石器一覧表（表1 62頁）に示してある。

細石刃（第16図1・2）

2点が確認された。石材が異なるものの両者ともに細身である。

1は折断加工はされておらず、いわば完形の細石刃である。黒曜石製。2は末端を背面側から折断した細石刃である。玻璃質安山岩製。

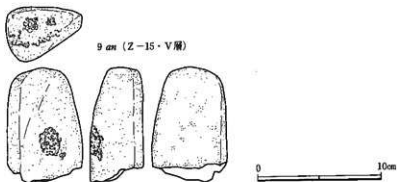
石刃状剥片（第16図3）

チャート製。頭部を背面側から折断している。また、端部は節理に沿って折損したものとと思われる。背面を構成する剥離面は、いずれも主要剥離面と同方向の打撃を示しており、単設打面石核から剥離が類推される。

槍先形尖頭器（第16図4・5）

4は細身の柳葉形を呈するが、右側縁下部に張り出した部分があり、左右非対称になっている。両側縁ともに微細な剥離痕が観察される。器体は両面ともに念入りの調整の施され、素材の形状を残さないものの、下端に素材剥片の打面と見られる節理があり、側面観から正面が素材となった剥片の主要剥離面であると考えられる。なお、先端部は欠損している。頁岩製。第V層出土。

5は幅広な木葉形を呈する。右側縁の中央部に節理面が残り、器体は右側縁節理面が張り出



第17図 第V層文化層の石器：敲石（1/3）

したようになるため左右非対称である。全体的に粗い調整であるが、左側縁はきれいな弧状に調整され、断面形は凸レンズ状である。左側縁には両面とも微細な剝離痕が観察され、あるいはこの左側縁が機能部位として用いられたように見える。両面調整であるが裏面の一部に素材剝片の主要剝離面が残っており、縦長剝片を素材としたことが窺える。チャート製。第V層出土。出土層位に基づいて第V層文化層に帰属させたが、形態的には第3次調査報告書（永峯・谷口編 1993）で第VI層文化層の槍先形尖頭器として報告された資料に類似しており、本書の第VI層文化層に帰属する可能性も残されている。

削器（第16図6・7）

6は幅広い縦長剝片の折断した端部を素材とし、折断面から素材剝片の主要剝離面にかけて平坦な剝離を行って緩斜度の刃部を作出している。刃部作出に先立って素材剝片の端部両面の一部にも不連続な調整が行われている。また、刃部では素材剝片の背面にもわずかながら剝離痕が見られる。チャート製。7は背面が原礫面で構成される剝片を素材とする。素材右側縁の縁辺に抉入状の急斜度の刃部を作出している。黒曜石製。

石核（第16図8）

下面に原礫面を残す。右側面からの加撃で形成した単剝離打面を用いた剝片剝離は、下面および右側面を調整してから正面を作業面として、打点を徐々に後退させながら行われており、約2cmの長さの小剝片を規格的に剝離したようすが窺える。なお、上面には加撃痕が明瞭に観察される。上面を打面とする前には、右側面を打面として正面で剝片剝離が行われており、最低1回の打面転位が考えられる。左側面の剝離がそれ以前に行われたものであるとすれば、右側縁を打面とした剝片剝離もまた、約2cmの長さの小剝片の生産を意図したものであることになる。同一母岩の剝片は出土していない。黒曜石製。

敲石（第17図9）

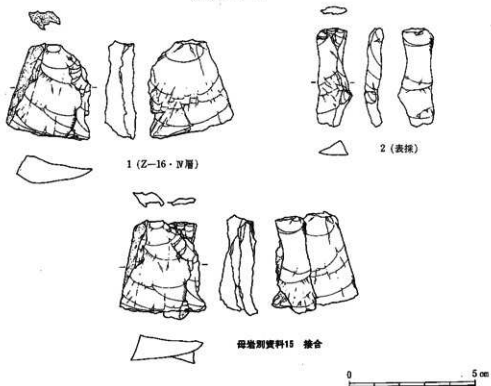
安山岩製。三角柱状の礫の平坦な一面の中央と上端の中央および稜に顕著な敲打痕が認められる。下半部は破損しているが、敲石として使用した過程で破損した場合と、破砕した礫を敲石として利用した場合とが考えられる。いずれの状態でも用いられたものか判断する材料は把握されない。

（角田）

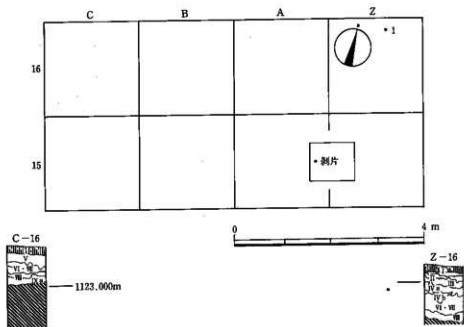
(2) 接合資料と剝片剝離技術

当該文化層に帰属する母岩別資料は、これまで14個体が得られている。今回新たにチャート製の母岩別資料1個体を追加した。これまでの調査で得られた当該文化層における母岩別資料は、すべてチャート製である。本文中の石器番号は母岩別に提示した石器実測図（第17図）の通し番号を示す。図示した石器の出土位置・計測値等のデータは、巻末の石器一覧表（表2 62頁）に示してある。

第3節 石器



第18圖 第V層文化層母地別資料15：接合圖 (3/4)



第19圖 第V層文化層母地別資料15：分布圖 (3/4)

母岩別資料15 (第18・19区)

石材

チャート

石質

緻密かつ均質で割れ口は貝殻状断口をなす。色調は原礫面は茶褐色を呈しているが、剥離面では青灰色を呈している。

素材

帰属する資料が剥片2点のみであることから正確には推定できないが、剥片2点の打面がいずれも原礫面であり、また、剥片のうち1点の左側縁に比較的大きく平坦な原礫面が残っていることを考慮すれば、河原石等の転石を利用しているものと考えられる。

資料

剥片2点からなる。

1は左側縁に原礫面を残す幅広い縦長剥片である。

2は石刃状の縦長剥片で、頭部調整が行われている。いずれも打面は原礫面である。

接合資料と剥片剥離工程

剥片1が剥片2の背面に接合する。

剥片1と剥片2ともに背面を構成するの剥離面は、剥片自体の主要剥離面と同じ加撃方向を示しており、同時に剥片1と剥片2ともに打面は原礫面であることから、原礫面を打面として連続的に縦長剥片を生産したようすが窺われる。単設打面石核を用いて生産された剥片である可能性は高いが、石核が含まれていない現状では断定はできない。

また、剥片1と剥片2の長さはほとんど同じことから敷衍すれば、連続的に剥離された他の剥片もまた同様の長さであった可能性が高く、一定の長さの剥片を目的とした剥片剥離技術が推察される。なお、剥片1には見られないが、剥片2では頭部調整が見られ、上記の剥片剥離技術の存在を傍証している。

分布

剥片1は表面採集資料であり、また母岩別資料15に分類される資料は、接合する剥片2のみであることから、分布上の特徴は把握できない。なお、剥片2はZ-15区からの出土であり、南西から北東へ向かって傾斜する遺跡の地形を考慮すれば、剥片2もプライマリーな包含状態ではない可能性が浮上してくる。いずれにしても母岩別資料分析のうえで今回の発掘区A~C、Z-15・16区では第V層文化層の石器群の分布が散漫であることが明らかとなった。

(中野)

第IV章 第VI層L文化層

第1節 概 要

第1次調査から第5次調査までを通じて第VI層の調査が完了している範囲はA～C、Z-10～16区の計28グリッド、面積112㎡である。

第VI層L文化層は第VI層中部から下部にかけて遺物出土の層位的ピークをもっており、現在までに石器134点、剥片・砕片936点、礫1485点の計2555点が得られている。槍先形尖頭器を伴うナイフ形石器を主体とする文化層である。主体となるナイフ形石器は石刃を素材に折衝技法によって素材の形状を変形させる点に製作技術上の特徴があり、二側縁調整のものと部分調整のものが多い。また、ナイフ形石器の素材を含む石刃は、両設打面石核を用いる点に剥片剥離技術上の特徴があり、いわゆる砂川期に比定される。

第VI層L文化層の遺構には、A・B-12区を中心にA・B・Z-11～14区にわたって不整形円形状に形成される礫群1基（第1号礫群）がある。石器群はこの礫群の北側A・B-13・14区に特に集中している（石器ブロック1）。石器群の集中が礫群の分布と重なることから、礫群の周辺で剥片剥離工程を含む石器製作が行われていたことが推察されている。

今回の第5次調査では、上記の第1号礫群や石器ブロック1の北方の8グリッド、A～C・Z-15・16区、面積32㎡を対象に発掘が行われた。

出土遺物の総点数は、石器7点、剥片・砕片60点の計67点出ある。石器7点の内訳は、ナイフ形石器3点、細部調整剥片2点、石刃1点、石核1点である。ナイフ形石器1点が黒曜石製であることを除けば、他はすべてチャート製である。調査の結果、A・B-13・14区を中心とする石器ブロック1はA・B-15区にはほとんど連続しないことが判明した。同時にこの石器ブロック1の周囲は石器群の分布がまばらで、新たに石器ブロックとして認定できるような集中箇所は認められなかった。

ところで過去4年次の調査で提示されている第VI層L文化層の母岩別資料5個体のうち、1個体（母岩別資料5）は、A-15区にも分布することがすでに明らかにされているが、今回のA～C・Z-15・16区における調査とその出土資料を含めた母岩別資料分析の結果、新たに3個体（母岩別資料6～8）が把握された。母岩別資料の分布は個体毎に大きく異なる傾向があり、今後、母岩別資料分析の進捗によっては石器ブロック1を細分できる可能性をもっている。本書では新たに母岩別資料6・7を提示し、その後、第6次調査資料と接合した母岩別資料8に関しては、第6次調査報告に譲っている。

（見目）

第2節 遺物分布状況

(1) 分布状態

第1次調査～第4次調査で第VI層L文化層には、A・B-12区を中心にして直径約8mの範囲に不整形円形状に分布する礫群1基（第1号礫群）と、礫群を取り巻くようにA・B-13・14区に石器の分布が集中する石器ブロック1か所（石器ブロック1）が発見されている。この礫群と石器ブロックの空間的な相関から、剥片剥離を含む石器製作が礫群の周辺で行われていることが想定されている（小林・谷口編 1991、谷口・宮尾編 1995）。

今回の調査では、前述の礫群と石器ブロックの北側A・C・Z-15・16区の8グリット、面積32㎡を調査した。その結果、ナイフ形石器3点、細部調整剥片2点、石刃1点、石核1点、剥片・碎片60点の合計67点の石器が得られた。これらの石器の分布状況（第20図）から、A・B-13・14区の石器ブロックがさらに北方にはひろがらないことが判明した。同時にその周囲にも石器の明瞭な集中が見られないことが明らかになった。

しかし、その一方でA・C・Z-15・16区出土の資料を含めた母岩別資料分析の結果、既調査区出土資料と接合する母岩別資料を新たに2個体（母岩別資料6・7）把握した。他に1個体（母岩別資料8）を得たが、その後、第6次調査資料と接合することが判明したため、第6次調査報告書に資料提示を譲り、本書では取り扱っていない。

(2) 検出層位

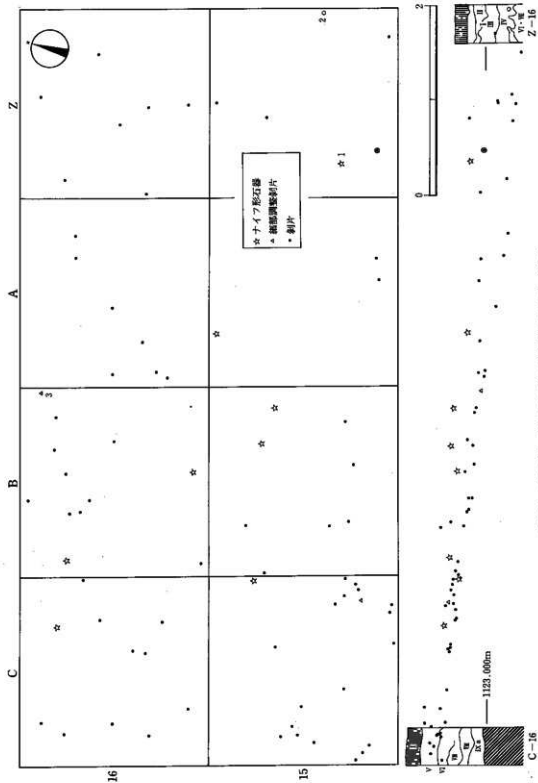
第2次調査と第4次調査の結果、第1号礫群および石器ブロック1の層準は、第VI層中部から第VII層上部にあることが確定的となった。特に第VI層下部に遺物出土の層位的ピークが存在することから、当該文化層の生活面は第VI層下部、あるいは第VII層上部に求められる。（小林・谷口編1992 谷口・宮尾編 1995）。

今回の調査区北壁面ならびに東壁面では、第VI層と第VII層は混ざり合ったような状態で確認され、第VI層L文化層や第VII層文化層の層準が不安定な堆積状況であることが判明した。特にA・B・Z-15区でその傾向は強い。検出された各石器は調査現場で、それぞれの出土層位を所見として記録しているが、このような層序の不安定さを鑑みれば、プライマリーな包含状態でなかった可能性が高い。

各石器の観察や母岩別資料分析を通して、当該文化層に帰属することにした石器の検出層位は第VI層を中心とするものの第IV層、第V層、第VII層にわたっている。石器の出土層位別点数の内訳は、第IV層出土3点、第V層出土8点、第VI層出土55点、第VII層出土1点であり、一応出土層位のうえでは第VI層L文化層とする蓋然性がある。

(田口)

第2節 遺物分布状況



第20図 第VI層I文化層の石器 器種別分布状況 (1/40)

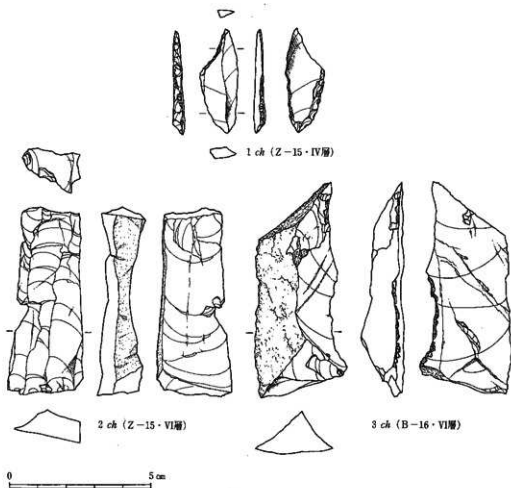
第3節 石器

(1) 石器

第VI層L文化層の石器は7点あり、その内訳はナイフ形石器3点、細部調整剥片2点、石刃1点、石核1点である。ここでは主要な石器3点を図示し、器種毎に記述する。本文中の石器番号は石器実測図(第21図)の通し番号を示す。石器についての出土位置や計測値等のデータは巻末の一覧表(表3 63頁)に示してある。

ナイフ形石器(第21図1)

ナイフ形石器は3個体あるが、図示した資料は1個体のみである。1個体は母岩別資料8に含まれるもので第6次報告に掲載し、ここでは提示していない。また、1個体は黒曜石製のナ



第21図 第VI層L文化層の石器：ナイフ形石器・石刃・細部調整剥片(3/4)

イフ形石器の先端部破砕片であり、今後の調査の進展を待って報告したい。

1は石刃を素材とし、素材を斜めに折断して形状を大きく変形させた後、腹面側から調整を加えている。基部調整は器体右側縁では先端部と同様に素材石刃の腹面側から行われるが、器体左側縁では素材石刃の背面側から行われている。チャート製。

石刃 (第21図2)

第4次調査で報告した母岩別資料5 (チャート) に含まれる。背面は上下二方向の剥離面で構成され、第4次調査報告 (谷口・宮尾編 1995) で接合資料に基づいて復元したように両設打面石核を用いた当該文化層に特徴的な石刃である。両側面に残る節理面によって幅が、上下に設置された打面によって長さが規定される。2の長さは接合資料で想定した最大長にあたる。打面調整や頭部調整は見られない。2の背面左の石刃の主要剥離面に対向する剥離面に頭部側半分を節理に沿って折損した破片1点が接合するが、第4次調査で報告した資料とは接合していない。接合する破片は、2の背面途中でステップレイキングを起こし、かつ剥片剥離の過程で頭部側半分が折損しており目的の長さに剥離できていない。Z-15区出土で第4次調査報告で示した母岩別資料5の分布範囲をさらに拡大させた。

細部調整剥片 (第21図3)

細部調整剥片は2点あるが、そのうちの1点を図示する。頭部が節理に沿って欠落している比較的厚手の縦長剥片。背面左側は原礫面で構成され、一部端部に続く。原礫面を残さない右側縁に細部調整が見られる。上部では腹面に、下部は背面に細部調整が連続的に施されている。

(見目)

(2) 接合資料と剥片剥離技術

当該文化層に帰属する母岩別資料はこれまでに母岩別資料1～5が把握されている。石刃 (第20図2) は、第4次調査報告 (谷口・宮尾編 1995) で提示した母岩別資料5に含まれるものである。今回の調査A～C、Z-15・16区で出土した資料を加えて行った母岩別資料分析によって、新たに母岩別資料6～8が得られた。そのうち、母岩別資料6と母岩別資料7を提示する。母岩別資料8はその後さらに第6次調査資料と接合したので次回報告に譲る。以下、母岩別資料毎に記載する。石器番号は各母岩別資料で付した押印の通し番号である。また、石器の出土位置や計測値は巻末 (表4・5 63頁) にまとめて掲げる。

母岩別資料8 (第22・23図)

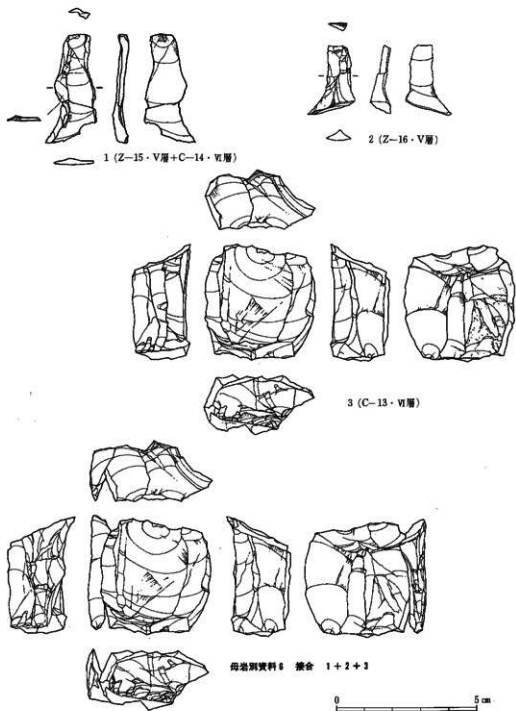
石材

チャート

石質

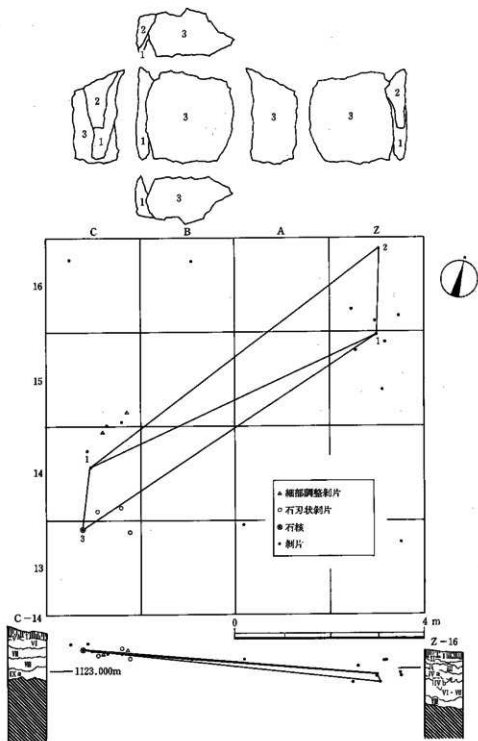
緻密であるが、部分的に節理がみられる。割れ口は貝殻状断口をなす。色調は塊状に赤褐色と青灰色を呈する。

第IV章 第VI層 L文化層



第22圖 第VI層 L文化層母岩別資料 6：接合圖 (3/4)

第3節 石 器



第29圖 第VI層L文化層母岩別資料6：分布圖 (1/80)

素材

素材の形状を明らかにできる資料がなく、推定できない。

資料

石核1点、細部調整剥片2点、石刃状剥片3点、剥片・破片22点の合計28点からなる。そのうち、石核1点と剥片2点からなる接合資料を図示する。1は破片2点が接合し、復元された縦長剥片である。打面は単剥離面で打面調整や頭部調整は認められない。背面は対向する加撃を示す剥離面から構成される。2は破碎して頭部の発見されていない縦長剥片である。3は第4次調査で報告された上下二面に複剥離面打面を形成した両設打面の平坦な石核である。下設打面を用いた剥片剥離は裏面から両側面にかけてを作業面とし、上設打面を用いた剥片剥離は正面のみを作業面とする。

接合資料と剥片剥離工程

石核3に剥片1が接合する。また、2は剥片1の背面に接合する。これらの接合資料から、両設打面石核を用いて、縦長剥片もしくは石刃を連続的に剥片剥離するようすが復元される。

破片2を含む剥片や剥片1は、下設打面を用いて裏面から両側面にかけてを作業面として剥片剥離が行われた段階のものである。下設打面を用いた剥片剥離は、裏面中央→両側面の順で行われており、その後、上設打面に180°打面転位して、正面では作業面脇から剥片剥離を開始して中央で終わる。縦長剥片の一部である破片2の背面端部に残る剥離面の存在から、最初に上下両面に打面を形成したことがわかり、剥離される剥片の長さの規格化の意図が読み取れよう。実際に剥片1の長さは、石核3の作業面長にほぼ一致する。しかしながら、剥片1と破片2を含む剥片はいずれも途中で破碎しており、目的の長さの縦長剥片や石刃は得られていない。

分布

出土層位は、第IV層出土2点、第V層出土10点、第VI層出土7点、第VII層出土9点で、第V層の出土が最も多い。平面分布上はC-13~15区とZ-15・16区とにまとまりが見られ、A・B-14~16区の間隙が生じる。安定した層序が観察できるC-13~15区第VI層下部出土資料に基づいて第VI層L文化層への帰属を認定した。

C-13~15区の分布のまとまりには細部調整剥片や石刃があり、剥片1の端部破片や石核3も含まれる。一方、Z-15・16区の分布のまとまりには剥片1の頭部破片や剥片の端部破片の2が含まれており、一連の剥片剥離工程の接合資料が二か所にまたがって分布している。破碎した剥片1は頭部破片と端部破片が、その両者にまたがって分布しており、場の性格と剥片剥離の目的を推定する場合に示唆的である。

石核3や剥片1の端部破片ともに複数の資料があるC-13~15区の分布のまとまりを剥片剥離の場と考えた場合、剥片1の頭部破片や剥片の端部破片の2はZ-15・16区の分布のまとまりに持ち出されていることになる。逆にZ-15・16区の分布のまとまりで剥片剥離が行われ、

その後、C-13~15区の分布のまとまりへ石核が持ち出され、引き続き剥片剥離が行われたと考えた場合でも、剥片1の端部碎片がZ-15・16区の分布のまとまりからC-13~15区の分布のまとまりへ持ち出されるか、あるいはC-13~15区の分布のまとまりからZ-15・16区の分布のまとまりへ剥片1の頭部碎片が持ち出されていることになる。いずれの場合を想定しても、破砕した剥片が平面的に移動しており、意図的な行動を推定できよう。

母岩別資料7 (第24・25区)

石材

黒曜石

素材

剥片と石刃素材のナイフ形石器の接合資料であり、素材は推定できない。

石質

緻密で割れ口は貝殻状断口をなす。霜降り状の縞があるが透明度が高い。

資料

ナイフ形石器4点、ナイフ形石器ブランディングチップ2点、剥片5点、計11点からなる。

ナイフ形石器1点と剥片1点の接合資料を図示する。

1は第4次調査で報告(谷口・宮尾編 1995)された左刃形の二鋼縁調整ナイフ形石器である。石刃の端部を斜めに折断し、折断面にブランディングが施される。石刃頭部および頭部付近に基部調整が施される。調整はいずれも腹面側からである。2は縦長剥片で、複剥離面打面が形成されている。背面は腹面と同方向加撃の剥離面で構成される。

接合資料と剥片剥離工程

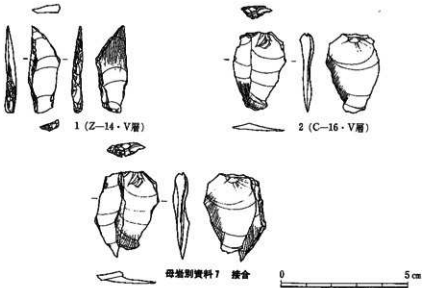
ナイフ形石器1が剥片2の背面左の剥離面に接合する。ナイフ形石器1の素材である石刃を剥離した打面と剥片2を剥離した打面は異なり、ナイフ形石器1の素材である石刃剥離後に打面再生が行われたことがわかる。なお、ナイフ形石器1ならびに剥片2の背面構成を見る限り、単設打面石核を用いた剥片剥離が予想される。

分布

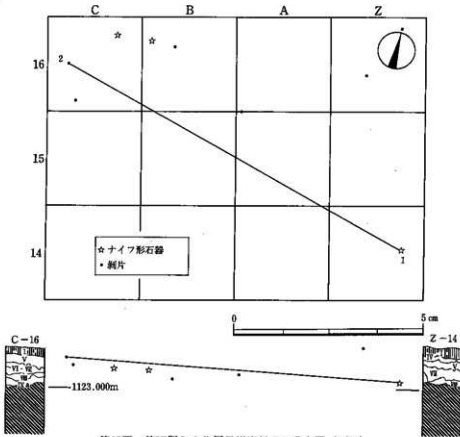
出土層位は第IV層出土1点、第V層出土5点、第VI層出土4点である。第V層出土資料が最も多いが、第VI層L文化層に主体的なナイフ形石器、およびナイフ形石器のブランディングチップを含むことから第VI層L文化層と認定した。

B・C-16区でナイフ形石器の碎片や剥片が散漫なまとまりを示す以外には、母岩別資料の特定の集中は見られず、他にはZ-14区やZ-16区で単独にナイフ形石器と剥片が出土しているだけである。Z-14区出土のナイフ形石器とC-16区出土の剥片が接合する。B・C-16区に見られる散漫な分布には、ナイフ形石器の碎片やナイフ形石器のブランディングチップが含まれており、B・C-16区付近での剥片剥離およびナイフ形石器の製作が示唆される。(中野)

第IV章 第VI層L文化層



第24図 第VI層L文化層母岩資料7：接合図 (3/4)



第25図 第VI層L文化層母岩資料7：分布図 (1/80)

第V章 第VII層文化層

第1節 概 要

第VII層文化層は第4次調査において初めて確認された。第4次調査ではA-C、Z-10-14区の20グリット、面積80㎡について第VII層および第VIII層を精査した。その結果、第VII層上部において礫群2基と3か所の石器ブロックを確認し、それらが分布の異なる第VI層L文化層に先行する文化層であることが層位的に把握された。

第5次調査では第4次調査の成果を受けて、第VII層文化層の石器群の内容のさらなる充実と石器群のひろがりを把握することを目的として、母岩別資料の分布を参考に、特に第2号礫群や石器ブロック2のひろがりが続く予想されるA-C・Z-15・16区8グリット、面積32㎡について発掘を行なった。

その結果、石器それぞれの出土層位の所見と母岩別資料に基づいて、ナイフ形石器1点、石核2点、剥片・砕片27点を第VII層文化層と認定した。第4次調査出土の資料と集計すると、合計1119点の資料が得られたことになる。しかし、今回調査した範囲のうちA・B、Z-15・16区では第VI層と第VII層が層序として分層できないような状態であり、不安定な堆積をなしていることが判明した。今後、石器群の帰属する文化層については、さらに母岩別資料分析等によって検証していく必要がある。

第4次調査では、ナイフ形石器11点、彫器削器1点、搔器3点、細部調整剥片18点、楔形石器2点、石刃・石刃状剥片23点、石核・石核素材11点、敲石1点という器種組成を示すまとまった資料を得て、第VII層文化層を小形の切出形のナイフ形石器を主体とする石器群として特徴づけている。また、当該文化層に帰属する石器に利用する石材がチャートを主体とし、黒曜石をほとんど使用しないこと、玻璃質安山岩が高い割合で用いられる点で第VI層L文化層と異なることをが明らかになっている（谷口・宮尾編 1995）。第5次調査で発見された石器群は、ナイフ形石器1点、石核2点、剥片・砕片27点に過ぎず、新たな所見を加えるには至っていない。なお、ナイフ形石器1点は、第4次調査で第VII層文化層に特徴的とされた小形の不定形剥片を素材とする切出し形のものである。

第4次調査では、空間的に近接する状況で確認される礫群と石器ブロックが明らかになっている。C-14区を中心として分布する石器群をまとめた石器ブロック2は、第2号礫群と近接しており、それらは第5次調査の発掘区域にひろがりの続くことが予想されていた。しかし、調査の結果はC-15区に限らず、少数の石器群が散漫に分布するのみで、石器ブロック2はほとんどひろがらないことが判明した。同時にその周辺にも石器群のまとまりは認められず、新

たに把握された石器ブロックはない。しかし、その一方で母岩別資料分析の結果、前述のナイフ形石器が石器ブロック3に含まれる掻器と接合していることが注意される。また、第2号礫群も、石器ブロック2同様に第5次調査区域にはひろがっていなかった。そして、その周囲においても礫群は新たに発見されていない。

(中山)

第2節 遺物分布状況

(1) 分布状態

今回の調査では、第VII層文化層の石器群の内容のさらなる充実と石器群のひろがり把握することを目的として、母岩別資料の分布を参考に、特に第2号礫群や石器ブロック2のひろがりが続くと予想されるA～C・Z-15・16区8グリット、面積32㎡について発掘を行なった。その結果、ナイフ形石器1点、石核2点、剥片27点、合計30点の資料を新たに得た(第26図)。

石器群の分布状況には、強いていえばC-16区にややまとまる程度であり、明確に集中する分布域は認められず、積極的に新たな石器ブロックを把握できなかった。ただし、後述するようにC-16区では、新たに把握された母岩別資料7の分布がやや集中した状態で見られることが注意される。なお、同時に今回の調査区にひろがるのが予想されていた石器ブロック2(谷口・宮尾編 1995)が、ほとんどB・C-15区以北にはひろがらないことが判明した。

また、同時に石器ブロック2と近接し、関連が示唆される第2号礫群(谷口・宮尾編 1995)についても、石器ブロック2同様にB・C-15区以北にはひろがらないことが明らかになった。そして、第2号礫群のひろがりに限らず、今回の調査区では礫群は新たに確認できなかった。

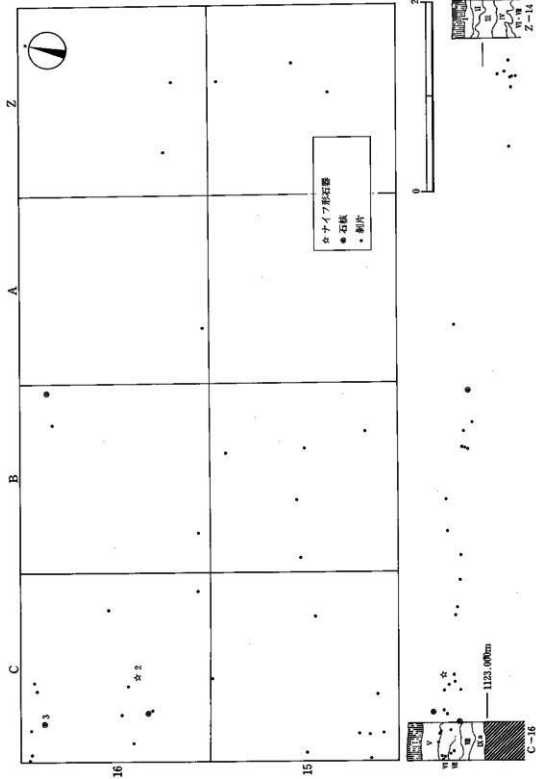
(2) 検出層位

第4次調査で出土した第VII層文化層の遺物は第VII層上部から中部にかけて集中し、2基の礫群ならびに3か所の石器ブロックで把握した当該文化層の生活面は、第VII層上部から第VII層中部に求められている(谷口・宮尾編 1995)。

今回の発掘対象区域であるA～C・Z-15・16区では調査区北面から東面にかけて、第VI層と第VII層が分層できず、層序が安定した堆積を示していない。そのため、石器は発掘現場でそれぞれ出土層位を記録してあるが、プライマリーな層位を示していない場合が予想される。当該文化層に帰属する石器群で第VII層出土の石器は、第VI層と第VII層が明確に分層され、安定した層序の観察できるC-15・16区を除くと、その分布が極めて希薄である。出土層位別の内訳は第V層出土1点、第VI層出土4点、第VII層出土25点となっている。

(田口)

第2節 遺物分布状況



第26図 第四層文化層の石器 種類別分布状況 (1/40)

第3節 石 器

第5次調査で出土した資料のうち、同一母岩に属するナイフ形石器1点、石核1点を母岩別資料7として提示する。同時にナイフ形石器は第4次調査で既報の石器ブロック3出土の搔器に接合するため、これを再提示して接合資料を示す。

なお、本文中の石器番号は挿図に付した通し番号を示す。石器出土位置や計測値等のデータは巻末の一覧表(表6 63頁)に示してある。

母岩別資料7(第27・28図)

石材

チャート

石質

緻密で脂肪光沢がある。色調は赤褐色を呈し、縞状に青灰色の部分がある。

素材

素材形状を明らかにできる資料はない。

資料

ナイフ形石器1点、搔器1点、石刃・石刃状剥片3点、石核2点、剥片・破片25点からなる。ナイフ形石器、搔器、石核それぞれ1点を提示する。

搔器 1は背面右側縁に平坦な原礫面を残す縦長剥片を素材とした搔器である。素材端部に腹面側から急斜度の調整を加え、尖鋭な形状を呈した刃部を作出する。素材縦長剥片の節理面を利用した打面はそのまま残置されているが、主要剥離面でバルブを除去し、平板な器体に整形している。表裏両面とも同一打面からの打撃を示す。

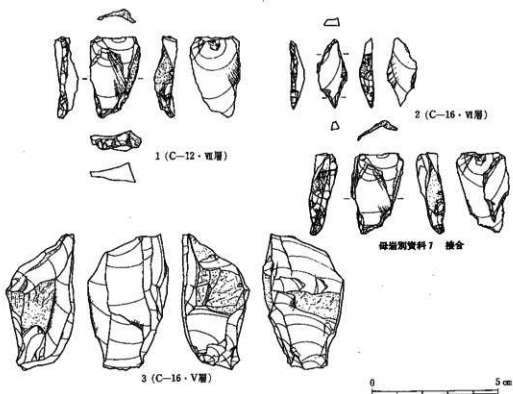
ナイフ形石器 2は剥片の一部を折断し、その折断面にブランディングを施した小形のナイフ形石器である。素材端部と折断面のなす尖鋭な部分に基部加工を施す。右刃切出し形を呈し、第4次調査報告(谷口・宮尾編 1995)で第Ⅶ層文化層に特徴的なナイフ形石器と考えられているものである。

石核 3は全周を作業面とする石核であるが、明確な打面形成が認められない。正面を作業面として、最低4枚の縦長剥片もしくは石刃が得られている。この剥片剥離の最後はウートラパッセを起こしている。その結果下面に生じた平坦面を打面にして裏面で剥片剥離を試みるが、節理に沿って破砕して、剥片剥離に必要な打面角を失い廃棄されている。

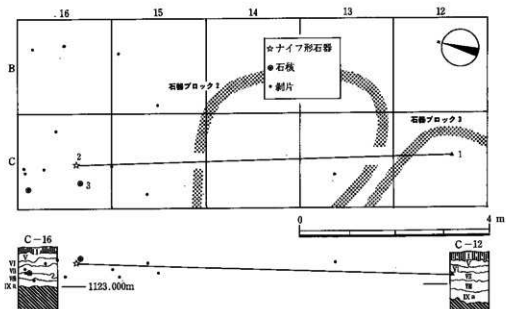
接合資料と剥片剥離工程

搔器1の裏面にナイフ形石器2の裏面が接合する。搔器1に残る節理面を打面に用いた剥片剥離によって素材を含む縦長剥片を連続的剥離した後、ナイフ形石器2の素材剥片は剥離されている。

第3節 石 器



第27図 第VII層文化層母岩別資料7：接合図 (3/4)



第28図 第VII層文化層母岩別資料7：分布図 (1/80)

分布

資料総数は32点である。出土層位は、第V層出土7点、第VI層出土10点、第VII層出土11点で、その他に第I層出土2点、表採2点がある。C-16区にナイフ形石器2や石核3を含む7点がややまとまって分布しており、未調査区である北方および西方へとひろがる可能性があるが、明確な集中範囲は把握できない。掻器1は第4次調査でC-12区を中心に把握された石器ブロック3に含まれる資料である。

石器ブロック3とナイフ形石器2や石核3を含む7点がややまとまって分布するC-16区の間には、C-14区を中心に把握される石器ブロック2が存在し、ここにも接合しないが同一母岩と判定される資料がある。

C-16区で母岩別資料7を含む石器群がややまとまる傾向にあることを積極的に評価し、接合事例をより強い空間上の関連を示す証拠と見なすとすれば、C-16区付近は、単に母岩別資料を共有するだけの石器ブロック2を挟んで、接合事例のある石器ブロック3と強い関連を示しているといえる。

石器ブロック2は、C-10区を中心に分布する石器ブロック1と母岩別資料が共通する場合が多く、そのうえ、石器ブロック間で接合関係が把握されていることから、石器ブロック3を挟んで、石器ブロック1と関連性が強い。なお、石器ブロック3には石器ブロック1と共通する母岩別資料も存在しており、同時にC-16区と石器ブロック2にもまた母岩別資料7の共有が認められ、これまでに把握されている石器ブロック相互は排他的な関係にあるわけではない。また、これらの石器ブロックは南北にほぼ等間隔にならんでいる。

つまり、これらの石器ブロックや分布のまとまりは、母岩別資料の共有によって相互に関連している。そのうえで、石器ブロック1と石器ブロック2、あるいは石器ブロック3とC-16区の石器群の散漫なまとまりがそれぞれ母岩別資料の接合事例によって特に強い関連性を示している。そして、それらは空間的な位置関係からいえば、相互に一方の石器ブロックを挟んで、存在している。このような石器ブロックあるいは分布のまとまり相互の関連は、それらの場の機能を考えるうえでも興味深い現象である。

(中山)

第VI章 D地点試掘

第1節 概 要

柳又遺跡群はこれまでの調査でA地点、B地点、C地点、柳又西遺跡の4か所からなることが確認されている。今回の調査で柳又遺跡群を構成する遺跡の具体的な把握を目指して、試掘を行った場所は、かつて樋口昇・森嶋隆がA II地点と呼称した一帯の一部にあたるものと考えられ、踏査によって遺物が採集されているものの発掘調査は行われていない。

試掘区はA I地点の西側、道路を隔てた一段高い狭い段丘上の畑地に設けた(第3図)。標高平均1127.200mの平坦な段丘で、過去四年継続的に調査を行ってきたA地点よりも3~4m高い。段丘の形に合わせて任意に設定した試掘区は1グリッド2m×2mで2グリッド、面積8㎡である。なお、各グリッドの名称はA地点の調査グリッドとの混乱を避けるために、A地点とは異なる名称を用い、西側からI区・ロ区とした。

今回の試掘は、特に当該地点の層序の確認と遺物包含層の遺存状態の確認を主な目的として実施されたが、調査の結果、表土層およびその直下には攪乱がみられたものの、良好な層序と層位的な遺物の出土を確認することができた。

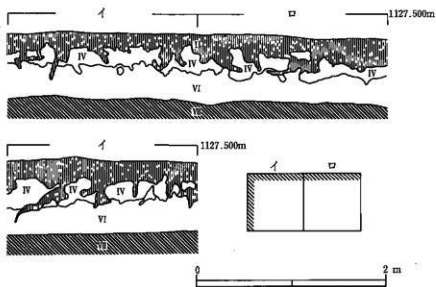
調査期間中の天候や日程の制約から表土から約100cm掘り下げたところで試掘を終えているが、層序はA地点の基本層序第IV層、第V層、第VI層、第VII層にそれぞれ対応する層位が確認された。なお、調査を終了した時点での最下部は、一部第VIII層に達している。

各層位の状態を概略すると、第I層(表土)から第V層までは排水溝の設置のために一部攪乱されており、必ずしも層位の遺存状態は良くない。第IV層はブロック状に観察され、第V層は大変薄く、部分的には確認できるものの層序としては分層できなかつた。第VI層以下には攪乱も及ばず、厚く安定した堆積を示している。

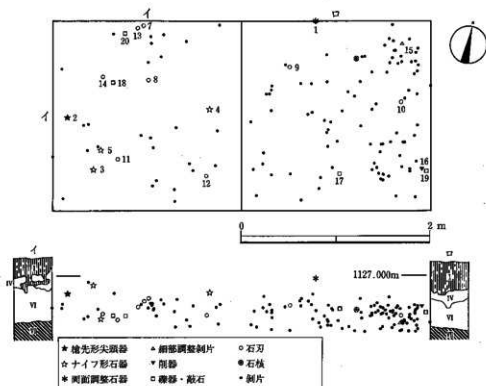
遺物は剥片・碎片を含む石器および礫が合計278点出土した。第V層より上位の層序に攪乱が著しいことを考慮しなければならないが、特に第VI層出土の遺物が多い。文化層の石器器種組成上の特徴を示しているわけではないが、石刃が多数出土している。また、槍先形尖頭器やナイフ形石器が含まれている。石器石材は、A地点と同様にチャートを主体として黒曜石や玻璃質安山岩がある。

試掘面積とその深度、あるいは発見された資料点数の制約があり、現状では文化層の分離を行なうことは困難である。そのため、A地点の編年、石器群の系統や石器の製作技術等と直接的な対比はできないが、少なくともナイフ形石器を主体とする石器群が包含されることは明らかである。

第VI章 D地点試掘

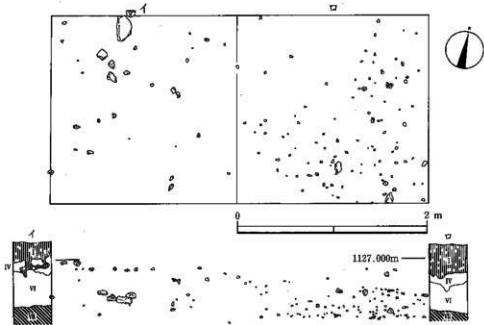


第29図 D地点 調査区の層序 (1/40)

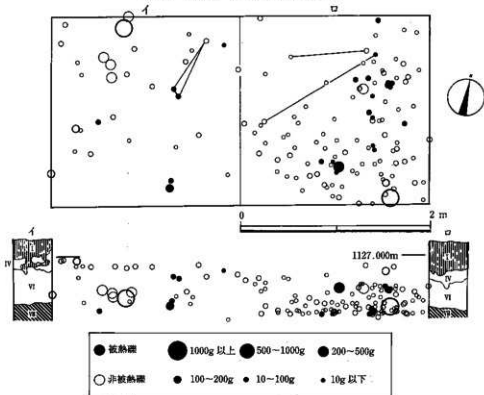


第30図 D地点 石器器種別分布図 (1/40)

第1節 概 要



第31図 D地点 礫の分布状態 (1/40)



第32図 D地点 礫の重量・被熱状態 (1/40)

なお、試掘を行なった部分については、発掘によって具体的にその内容を把握した地点として、具体的な範囲が不詳なAⅡ地点とは区別し、D地点と称することとした。以下、当該試掘区を設定した地点についてD地点試掘区と記載する。

(仲田)

第2節 層序と分布

(1) D地点試掘区の層序

D地点試掘区北面および西面で確認されたA地点の基本層序に対応する各層位の内容は以下のとおりである(第29図)。

第I層：表土。灰褐色土層。層厚は平均で25cm程度。

第IV層：暗褐色土層。微量の青灰色スコリア粒子を含む。ブロック状に堆積する。

第V層：極めて薄く、分層は困難である。

第VI層：暗黄褐色のハードローム層。径1～5mm程度の青灰色スコリア粒子を微量含む。また、微量の赤・白・黒色スコリア粒子が混ざる。粘性、しまりともに強い。層厚は平均して35cm程度。安定した堆積を示す。

第VII層：明黄褐色のハードローム層。径1～8mmの赤・黒色スコリア粒子を微量に含む。

第VI層よりも色調は明るく、しまりはやや軟質である。

調査区南面では第IV層から第VI層上部にかけて畑地の排水溝を通した部分が攪乱となって観察できる。そのため、第VII層ならびに第V層から出土の遺物点数は少ない。また、第V層は検出された遺物について現場所見として出土層位を記録することは可能であったが、堆積が薄く分層することはできなかった。安定した堆積を示す第VI層以下では、多くの遺物が含まれていたが、第VII層上部まで精査した時点で試掘を終了したので文化層の分離は行っていない。

なお、第VI層以下の層位はほぼ水平に堆積しており、部分的な乱れも認められていない。また、地形の傾きは東西方向、南北方向とも、いずれの層位でも確認されていない。このような層序の観察から含まれていた遺物は、プライマリーな状態にあるものと見られ、層位的に把握することが可能である。

(菅原)

(2) 遺物の分布

D地点から出土した遺物は合計で278点で、その内訳は石器・剥片類139点、礫139点である。今回は試掘面積とその深度の制約から、石器や礫を文化層毎に分離しているわけではないのであくまで傾向に過ぎないが、遺物の分布は試掘区中央北部であたかも空白域を形成するように、イ区北西とロ区南東に偏っている(第30・31図)。それは石器に限ってみた場合、礫に限ってみ

第2節 層序と分布

た場合ともに共通して捉えられる傾向であり、石器と礫の分布に空間上の相関が予想される。

また、石器を製品に限ってみればイ区北西の分布のなかに多く、ロ区南東の分布のなかに少ない。ロ区南東では分布のまとまりの中央は切片に限られ、その周辺に石器製品がある（第29図）。一方、礫もイ区北西とロ区南東とで礫の大きさに違いがあり、重量200g程度、拳以上の大きさの礫はイ区北西には点在しているが、ロ区南東には大形の礫は存在せず、代って小形の礫が比較的密集する（第31・32図）。

出土した礫は合計139点である。出土層位の内訳は、第IV層14点、第V層1点、第VI層89点、第VII層35点となっている。このうち第VI層以下から出土した礫は、特にイ区北西とロ区南西に集中的にまとまって分布している。

礫の遺存状態は、次のA～Eの5つに分類している。

A：完形 B～E：破砕礫（B：3/4以上残 C：1/2程度残 D：1/4程度残 E：小破片）

D地点試掘区出土の礫の遺存状態は、A 2点（1.4%）、B 2点（1.4%）、C 2点（1.4%）、D 8点（5.8%）、E 125点（89.9%）である。圧倒的にEが多く、遺存状態は破損の著しく進んだものが一般的であることがわかる。それはロ区南東に特に多い小形の礫は破損の著しく進んだ小破片が一般的であることを意味する。ちなみに出土礫全体の総重量は4484.94gで、平均値は32.27gである。

また、礫相互の接合は、比較的大形の礫が分布するイ区北西で小破片2点1例を、小形の礫が多く分布するロ区南西で小破片6点3例を確認できるに過ぎない。ロ区南西では破損の著しく進んだ小破片の礫が多いにも関わらず礫相互の接合が少ないことから、ロ区南西における礫の散在する傾向が特に顕著であることが指摘できよう。ただし、小破片2点1例が接合するイ区北西付近には、重量200g以上の比較的大形の礫が点在し、層位的にも一定していることから配石の可能性も同時に推察できよう。

なお、被熱礫は24点（17%）に過ぎず、さらに付着物の観察できたものは5点（3.6%）と少ない。また、礫の石材別内訳はチャート69点（49.6%）、安山岩44点（31.7%）、砂岩24点（17.3%）、玻璃質安山岩1点（0.7%）、ホルンフェルス1点（0.7%）であり、チャートが占める割合が高いが、重量を指標にみれば安山岩や砂岩が突出して多く、同時に被熱礫はこれらの石材に集中する。小破片の礫が散在する傾向と照らし合わせれば、本来は安山岩や砂岩を主要な石材とした礫群が散逸した状況を推定される。

なお、試掘区はわずか8㎡に過ぎず、石器や礫の全体的なひろがりの把握できないため、上記の記載はあくまで傾向に過ぎない。また、文化層の分離もできていないため、礫群や配石、ならびに石器ブロックの認定には至っていない。

（仲田）

第3節 石 器

合計139点出土した石器には、第IV層出土の両面調整石器1点、剥片4点、第V層出土の槍先形尖頭器1点、剥片1点、第VI層出土のナイフ形石器3点、石刃・石刃状剥片9点、細部調整剥片1点、削器1点、石核1点、敲石3点、台石1点、剥片119点第VII層出土の剥片6点がある。試掘区の面積がわずか8㎡に過ぎず、また試掘範囲の精査は第VI層までにとどまっていることから、文化層の分離は行なえていないが、A地点の各文化層の石器群と比較してみた場合、第V層文化層の主体を占める細石刃および細石刃剥離に関わる細石刃関係資料は発見されていない。第V層中から出土した石器には槍先形尖頭器があるが、A地点では第V層文化層とその前後の文化層に槍先形尖頭器が組成しており、いずれの文化層に認定されるものか判断できる材料がない。第VI層出土の石器にはナイフ形石器が含まれており、A地点第VI層M文化層以下の文化層に対比される可能性を有する。同じ第VI層出土の石刃・石刃状剥片には両設打面石核を用いたものがあり、A地点の文化層で同様の石刃技法に特徴を求められる第VI層L文化層に対比される可能性が高い。

これら文化層の認定されていない石器のうち、主要な石器20点を図示し、それぞれについて出土層位等の若干の記載をする。なお、本文中の石器番号は挿図(第33～36図)に付した通し番号に対応する。また、各石器の出土位置、計測値等のデータは巻末(表7 64頁)にまとめられている。

両面調整石器 (第33図1)

チャート製の分厚い剥片を素材とし、素材の両面に比較的大振りの調整を施している。平面形態をみると先端部は丸みを帯びており、意識的な作出が認められるもの下端部には原礫面を一部残している。左右対称ではなく、側面観も先端部が裏面側に反りをみせる。両側縁は薄く仕上げられており、断面形は菱形を呈する。A地点出土資料では縄文時代草創期前半の文化層出土の資料に特徴的に見られる。第V層出土。

槍先形尖頭器 (第33図2)

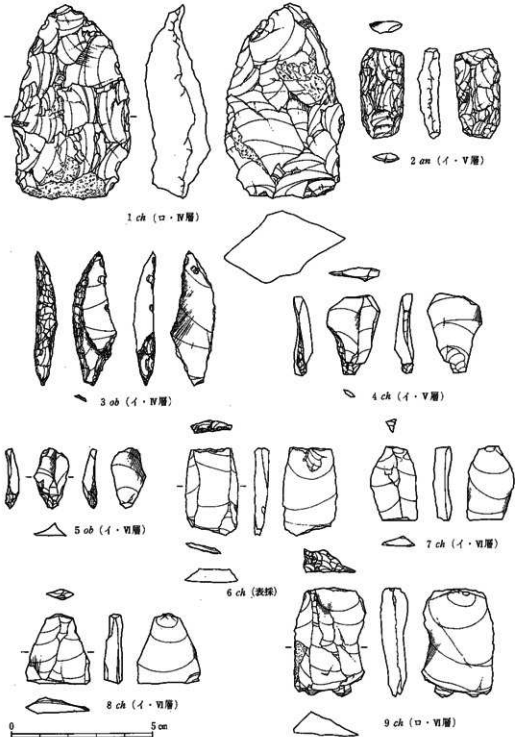
安山岩製。尖頭部ならびに基部を欠損しているものの、本来は柳葉形の槍先形尖頭器と思われる。器体表面は階段状に剝離されて甲高になっているが、裏面側は平坦剝離によって偏平に仕上がっている。そのために断面形は山形を呈する。第V層出土。

ナイフ形石器 (第33図3～5)

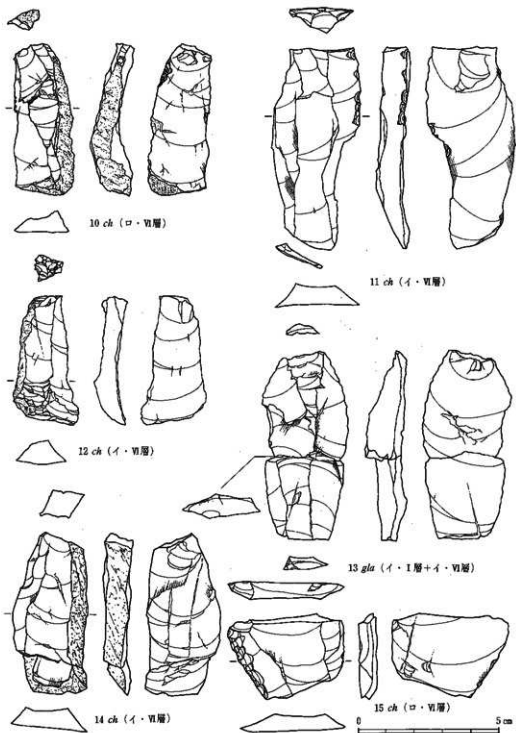
3点ある。いずれも第VI層出土。

3は黒曜石製の縦長剥片を素材にし、折断技法によって大きく変形させ、二側縁にプランテイングを施す。その結果、鋭い先端と器体の半分以上に及ぶ刃部を持つ二側縁加工のナイフ形石器となっている。

第3節 石 器



第33圖 D地点 出土石器(1): 両面調整石器・槍先形尖頭器・ナイフ形石器・石刃・石刃状切片(3/4)



第34圖 D地点 出土石器(2):石刃・石刃状切片・細部調整切片 (3/4)

第3節 石 器

4はチャート製の剥片を素材とし、基部の左側縁に連続的なブランディングを加えた一側縁加工のナイフ形石器である。素材の打面を基部に小さく残している。先端を欠く。

5は小形の剥片の両側縁を刃部に用い、基部に調整を施している。先端部は欠失している。素材となった剥片の打点は基部側に持つが、調整によって除去されている。黒曜石製。

石刃・石刃状剥片 (第33図6～9、第34図10～14)

9点。いずれも第VI層出土。

6はチャート製。複剥離面打面であり、打面調整が並列に施されている。下端部は折損しているが、両設打面石核を用いたものである。

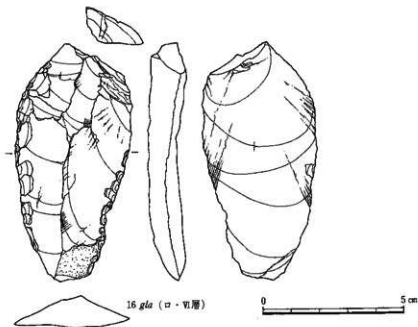
7は単剥離面打面石核を用いたもので、断面形は三角形を呈する。チャート製。

8は複剥離面打面を持つ。背面左側の風化が著しい。チャート製。

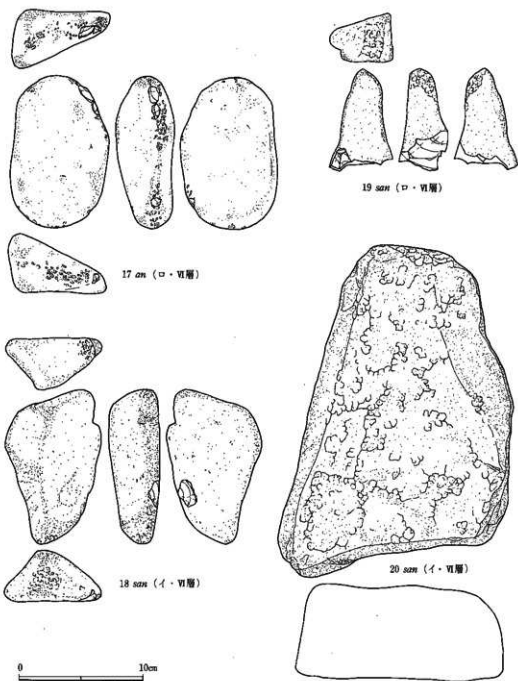
9はチャート製。打面調整が入念に施されている。下部は節理に沿って剥離と同時に折損したものと考えられる。

10は側面視が「し」の字状を呈する。打面、左側縁、端部に連続する原礫面を残し、剥片剥離を行なった素材が原礫を直接利用したものであったことが類推される。背面を構成する剥離面は主要剥離面と同方向からの加撃を示している。チャート製。

11は複剥離面打面石核から剥離されたものである。右側縁上部に刃こぼれ状の微細剥離痕が観察される。下端部を折損している。チャート製。



第35図 D地点出土石器(3): 削器 (3/4)



第38圖 D地点出土石器(4): 敲石・台石 (1/3)

12は10と同様にチャート製の「し」の字状剥片である。打面は入念な調整が施される。

13は玻璃質安山岩製で、器体のはば中央で破砕した砕片二点が接合した石刃である。下端部は折損している。節理が多く走り、接合面付近では剥離が節理面で階段状になっており、石刃剥離の段階で折損したものと考えられる。背面構成では対向する上下二方向からの剥離を示し、両設打面石核から剥離されたことが考えられる。両設打面石核を用いた石刃技法は、A地点では第VI層L文化層に特徴的に見られる。

14は右側面から背面にかけて大きく原礫面を残す。チャート製。節理面に沿って端部が変形している。

細部調整剥片 (第34図15)

やや幅広の縦長剥片の左側縁に緩斜度の調整が連続的に施されている。上部が折損している。左側縁すべてに細部調整が施されていたものであるかどうかは判断できないが、少なくとも折損部位には、失った剥片頭部側へと続く剥離面が見られる。チャート。第V層出土。

削器 (第35図16)

比較的大形の縦長剥片を素材とする。左右両側縁の素材背面に連続的に平坦な剥離で調整を施して刃部を作る。左側縁にはさらに微細剥離痕が観察される。素材の打面や素材背面の下端部右の風化した面が残るなど、素材をそのまま用い器体の整形は行われていない。玻璃質安山岩製。第VI層出土。

敲石 (第36図17～19)

出土礫の中に使用痕跡のあるものが3点あり、敲石と認定した。いずれも第VI層出土。

17は扁平な楕円形の礫を利用している。安山岩。礫の稜上ほぼ全周にわたって顕著に敲打痕が認められる。特に礫の長軸に対する両端では剥離痕を伴う敲打痕が見られる。

18は扁平な三角形の礫を用いたものである。最も長い稜上から稜と稜のなす突端にかけて敲打痕はある。特に下端として図示した突端の敲打痕は窪みが大きく顕著である。稜上には剥離痕も見られる。

19は破砕した礫である三角錐状の礫を使用している。破砕した状態で敲石として用いられたものか否かは判断できないが、突端付近の稜上の礫面に敲打痕が集中して観察される。砂岩。

台石 (第36図20)

厚みのある立方体の礫を利用している。表裏面ともに平坦であるが、表面側にのみ敲打によって生じた窪みがある。敲打痕が一面でしか確認できないことと、重量5kgを越えて手に持つて使用できるものではないことを根拠に台石とした。第VI層出土。

(仲田・中山)

表1 A地点第V層文化層の石器

石器番号	種別	No.	北から (cm)	西から (cm)	標高 (m)	層位	石質	器長 (cm)	器幅 (cm)	器厚 (cm)	側面角 (°)	打面角 (°)	刃部 全長 (cm)	刃部 幅 (cm)	刃部 角 (°)	刃部 長さ (cm)	重量 (g)	文化層 遺存状態
1	磨石刀	A-16 39	25.0	2.0	1123.095	VIF	ob	2.69	0.58	0.42	52	-	-	-	-	-	0.27	V
2	磨石刀	C-15 15	150.0	84.0	1123.615	V	ga	2.28	0.72	0.20	-	-	-	-	-	-	0.28	V
3	石片状刮片	C-16 13	150.0	89.0	1123.521	V	ch	2.54	2.64	1.04	-	-	-	-	-	-	6.94	V
4	磨石形尖頭器	Z-15 18	73.0	25.5	1122.576	V	sb	6.69	1.77	1.86	-	-	-	-	-	-	9.87	V
5	磨石形尖頭器	Z-15 4	124.0	33.0	1123.097	V上	ch	7.77	2.87	1.15	-	-	-	-	-	-	17.95	V
6	磨石	Z-15 29	33.5	87.5	1122.884	V	cb	5.21	4.93	1.30	-	-	-	4748 左刃	355.13 54.52	24.32	V	
7	磨石	Z-16 5	172.5	130.5	1123.119	IV上	ob	4.22	2.47	1.23	106	-	-	84	1.64	11.56	V	
8	刮片	Z-15 10	80.0	136.5	1123.194	IV上	ob	2.52	2.82	2.34	-	71	1.96	-	-	14.92	V	
9	磨石	Z-15 31	10.0	126.0	1122.780	V	ms	9.28	6.19	4.29	-	-	-	-	-	332.03	V	

表2 A地点第V層文化層母岩別資料15

母岩番号	種別	No.	北から (cm)	西から (cm)	標高 (m)	層位	石質	器長 (cm)	器幅 (cm)	器厚 (cm)	側面角 (°)	打面角 (°)	刃部 全長 (cm)	刃部 幅 (cm)	刃部 角 (°)	刃部 長さ (cm)	重量 (g)	文化層 遺存状態
1	刮片	Z-16 7	24.5	122.5	1122.845	IV	ch	3.84	3.36	0.22	105	-	-	-	-	-	13.04	V
2	刮片	表様	-	-	-	-	ch	3.80	1.37	0.72	118	-	-	-	-	-	-	-

表3 A地点第VI層L文化層の石器

石器番号	種別	No.	北から (cm)	西から (cm)	標高 (m)	層位	石質	器長 (cm)	器幅 (cm)	器厚 (cm)	側面角 (°)	打面角 (°)	刃部 全長 (cm)	刃部 幅 (cm)	刃部 角 (°)	刃部 長さ (cm)	重量 (g)	文化層 遺存状態
1	ナイフ形刮片	Z-15 3	141.0	36.0	1123.159	IV下	ch	3.64	1.40	0.41	-	-	-	-	42	1.53	1.99	VI
3	刮片	Z-15 51	123.0	136.0	1122.757	VI	ch	6.56	2.69	1.59	105	-	-	-	-	-	24.26	VI
3	細部調整刮片	B-16 67	23.0	134.5	1123.049	VI下	ch	7.53	3.18	1.55	-	-	-	-	-	-	27.61	VI

表 4 A地点第VI層L文化層母岩資料 6

母岩 番号	検 測	No.	北から (cm)	西から (cm)	標高 (m)	層位	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	打面内 傾斜角 (°)	石積内 傾斜角 (°)	石部 傾斜角 (°)	石部 傾斜角 (°)	重量 (g)	文化層 遺存状態
1	剥片	Z-15 30	8.0	180.0	1122.871	V	ch	3.61	1.82	0.53	101	-	-	-	1.59	VI
		C-14 123	88.0	96.0	1123.414	VI	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2	剥片	C-16 10	97.0	45.0	1123.857	V	cb	3.07	2.10	0.58	99	-	-	-	2.11	VI
3	石核	C-13 168	18.0	77.0	1123.653	VI	ch	4.25	3.94	1.37	-	65	3.46	-	37.09	VI

表 5 A地点第VI層L文化層母岩資料 7

母岩 番号	検 測	No.	北から (cm)	西から (cm)	標高 (m)	層位	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	打面内 傾斜角 (°)	石積内 傾斜角 (°)	石部 傾斜角 (°)	石部 傾斜角 (°)	重量 (g)	文化層 遺存状態
1	十ノ丁形石器	Z-14 13	95.0	151.5	1123.130	V	cb	3.42	1.25	0.38	-	-	-	48	1.46	VI 充分
2	剥片	C-16 17	22.5	106.5	1122.722	V	ch	2.44	1.68	0.79	-	-	-	-	1.09	VI

表 6 A地点第VII層文化層母岩資料 7

母岩 番号	検 測	No.	北から (cm)	西から (cm)	標高 (m)	層位	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	打面内 傾斜角 (°)	石積内 傾斜角 (°)	石部 傾斜角 (°)	石部 傾斜角 (°)	重量 (g)	文化層 遺存状態
1	掻跡	C-12 160	129.0	111.5	1123.198	VI中	ch	3.19	1.98	0.88	-	-	-	64	4.76	VI 充分
2	十ノ丁形石器	C-16 72	122.5	89.5	1123.445	VI	ch	2.68	1.16	0.51	-	-	-	46	1.32	VI
3	石核	C-16 6	134.0	52.0	1123.559	V	ch	5.36	3.15	2.65	-	5.30	-	-	43.55	VI

表 7 D地点出土石器計測表

石器 番号	種 別	No.	北-西 (cm)	北-東 (cm)	厚高 (cm)	層位	石質	身長 (cm)	弦幅 (cm)	断面 (cm)	鈍角 (°)	石面角 (°)	石口角 (°)	石口 開口 (°)	先端角 (°)	刃部長 (cm)	重量 (g)	火燒 痕跡	保存状態		
1	両面調整石器	□	4	0.0	79.0	1126.561	IV	ch	6.77	4.21	2.32	-	-	-	-	-	-	57.54	焼文		
2	槍先形尖頭器	△	3	102.0	16.0	1126.516	V	an	3.15	1.55	0.76	-	-	-	-	-	-	4.38	V		
3	ナイフ形石器	△	7	157.5	43.0	1126.565	IV	ob	4.65	1.57	0.77	-	-	-	28	2.84	3.18	VI	VI		
4	ナイフ形石器	△	18	94.0	166.0	1126.817	V	ch	2.79	1.84	0.62	94	-	-	-	-	-	2.48	VI	VI	
5	ナイフ形石器	△	55	136.5	51.0	1126.546	VI中	ob	2.05	1.17	0.45	89	-	-	-	-	-	0.89	VI	VI	
6	石刃	□ 黄土 1	-	-	-	-	I	ch	3.06	1.87	0.47	95	-	-	-	-	-	3.08	VI	VI	
7	石刃	△	66	5.0	97.0	1126.733	VI上	ch	2.58	1.61	0.60	91	-	-	-	-	-	2.26	VI	VI	
8	石刃状削片	△	31	62.0	101.5	1126.783	VI上	ch	2.41	2.25	0.82	98	-	-	-	-	-	2.83	VI	VI	
9	石刃	□	27	49.0	51.5	1126.688	VI	ch	3.77	2.46	0.88	102	-	-	-	-	-	7.54	VI	VI	
10	石刃	□	63	86.0	189.0	1126.572	VI中	ch	5.29	2.08	1.48	108	-	-	-	-	-	12.14	VI	VI	
11	石刃	△	56	146.0	69.0	1126.539	VI中	ch	7.20	3.27	1.23	-	-	-	-	-	-	23.69	VI	VI	
12	石刃	△	46	164.0	163.0	1126.585	VI中	ch	4.54	2.28	1.15	105	-	-	-	-	-	8.06	VI	VI	
13	石刃状削片	△ 黄土 1	-	-	-	-	I	gls	-	-	-	-	-	-	-	-	-	12.69	VI	VI	
13	石刃状削片	△	38	8.0	90.5	1126.670	VI上	gls	6.70	3.00	1.39	101	-	-	-	-	-	8.20	VI	VI	
14	石刃	△	29	59.0	53.0	1126.595	VI中	ch	5.67	2.58	1.01	96	-	-	-	-	-	14.17	VI	VI	
15	細部調整削片	□	130	24.0	189.0	1126.497	VI	ch	2.91	4.08	0.66	-	-	-	-	-	-	9.92	VI	VI	
16	削器	□	56	157.5	191.0	1126.666	VI中	gls	8.33	4.12	1.41	104	-	-	-	-	-	右4.54 左5.69	39.55	VI	VI
17	棒石	□	7	161.0	104.0	1126.653	VI	an	12.33	7.92	4.79	-	-	-	-	-	-	427.35	VI	VI	
18	棒石	△	49	64.5	64.0	1126.586	VI中	san	12.50	7.83	4.26	-	-	-	-	-	-	397.98	VI	VI	
19	棒石	□	105	158.0	195.0	1126.615	VI	san	8.14	5.06	3.92	-	-	-	-	-	-	138.16	VI	VI	
20	棒石	△	52	15.0	77.0	1126.575	VI中	san	27.39	13.67	7.67	-	-	-	-	-	-	560.00	VI	VI	

引用参考文献

- 青木 豊・内川隆志・高橋真実編 1993「柳又遺跡C地点」開田村教育委員会
- 麻生 優・下川達彌・白石浩之・岡本東三ほか 1991「岐阜県池の原遺跡概要」『日本旧石器時代から縄文時代への推移に関する構造的研究』6～15頁 平成2年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書
- 加藤晋平・鶴丸俊明 1991『図録石器入門事典 先土器』柏書房
- 金山喜昭 1987「先土器時代の確群研究史 - その研究意義と今後の課題 -」古代文化39-7
- 金山喜昭 1988「確群の機能と用途」古代文化40-8 1～20頁
- 神村 透・山下生六 1986『開田高原大原遺跡-押型文土器と石器-』長野県木曾建設事務所・木曾郡開田村教育委員会
- 小林武彦・高木信行・藤井富美夫 1977「御岳火山新时期御岳テフラ層の模式柱状図」軽石学雑誌4 37～41頁
- 小林達雄 1966「縄文早期前半に関する問題」『多摩ニュータウン遺跡報告II』多摩ニュータウン遺跡調査会
- 小林達雄編 1988「小馬背遺跡」國學院大學文学部考古学研究室
- 小林達雄編 1989「小馬背遺跡1989」國學院大學文学部考古学研究室
- 小林達雄編 1990「柳又遺跡A地点 第1次発掘調査報告書」國學院大學文学部考古学研究室
- 小林達雄・谷口康浩編 1992「柳又遺跡A地点 第2次発掘調査報告書」國學院大學文学部考古学研究室
- 酒井潤一 1963a「木曾谷のローム層I」地球科学67 13～20頁
- 酒井潤一 1963b「木曾谷のローム層II」地球科学68 19～21頁
- 鈴木忠司編 1994「勾坂中遺跡群発掘調査報告書」静岡県企業局・磐田市教育委員会
- 谷口康浩 1991「木曾開田高原柳又遺跡における細石刃文化」國學院雑誌92-2 21～51頁
- 谷口康浩 1992「開田高原柳又遺跡A地点の発掘調査」『第5回 長野県旧石器文化交流会-発表要旨-』47～57頁
- 谷口康浩・宮尾亨編 1995「柳又遺跡A地点 第4次発掘調査報告書」國學院大學文学部考古学研究室
- 高根村史編纂委員会編 1984「高根村史」岐阜県大野郡高根村
- 竹本弘幸・百瀬 賢・平林 潔・小林武彦 1987「新时期御岳テフラ層の層序と時代」第四紀研究25-4 337～352頁
- 辻本義夫 1984「細石器文化の遺構」駿台史学60
- 辻本義夫 1984「確群研究の現状と課題」東京の遺跡4
- 辻本義夫 1987「確群の形成過程復元とその意味」古代文化39-7
- 永峯光一・谷口康浩編 1993「柳又遺跡A地点 第3次発掘調査報告書」國學院大學文学部考古学研究室
- 樋口昇一・森嶋 稔 1959「木曾開田高原の無土器文化遺跡」信濃11-11 51～60頁
- 樋口昇一 1961「木曾柳又遺跡第1次調査について」信州ローム7 3～9頁
- 樋口昇一・森嶋 稔 1967「長野県西筑摩群柳又遺跡」日本考古学年報15 73～74頁 日本考古学協会
- 藤沢赤平・小林国男 1956「長野県西筑摩郡古屋敷遺跡の無土器文化」日本考古学協会第18回発表要旨 24～25頁
- 藤沢赤平ほか 1956「長野県西筑摩郡古屋敷遺跡特集」信州ローム1 1～14頁
- 森嶋 稔 1959「開田高原のアルケオロジカル散歩」木曾教育13 31～37頁
- 森嶋 稔 1983「柳又遺跡」『長野県史』考古資料篇1-3(1)(中信)長野県史刊行会

発掘調査参加者・関係者一覧

考古学実習生

見目有美子 新生 実 菅原伸也 田口 雷 津田俊輔 角田真也 仲田大人 中野拓大 中山貴正
新田康則

発掘特別参加者

西 宏 加藤大和 北野みづほ 久木田照子 熊沢孝之 小泉 一 坂田耕造 高木 勉 滝浪美登里
中村祥子 福山 健 袋井健太郎 松島悦子 (以上國學院大學学生)

岡崎友子 小林健司 小林康文 小林理恵 中村 大 橋本裕子 松澤浩一 若泉 亮(以上國學院大學
大学院学生)

角井俊之 近藤智子 野路昌嗣 (以上青山学院大学学生) 関間俊明 (青山学院大学大学院学生)

内田真味子 木村佐枝子 長谷川美香 福島陽子 (以上東京女子大学学生) 田村 司 (中央大学学生)
松原和也 (富山大学学生)

整理参加者

安西 宏 内田真味子 関間俊明 加藤大和 北野みづほ 久木田照子 小泉 一 小林康文 近藤智
子 坂田耕造 高木 勉 滝浪美登里 田村 司 中村祥子 野路昌嗣 福山 健 袋井健太郎 松澤浩
一 松島悦子 若泉 亮

発掘協力者・機関

長野県教育委員会 開田村教育委員会 長野県埋蔵文化財センター 開田村村立考古資料館 学校法人
市邨学園 國學院大學考古学資料館 國學院大學博物館学研究室 たけみ商店 嶽見旅館 村上和幸
(柳又遺跡A地点地主) 下村喜美代(柳又遺跡D地点地主) 千村博男(開田村教育委員会教育長) 下
畑睦美・高宮勇一(開田村教育委員会) 柳沢 博・田村栄作(開田村立開田小学校) 末岡熙章(学校
法人市邨学園理事長) 山下生六 森鳴悠 丸山敏一郎 樋口昇一 神村透 嶽見盛三 古畑正美 加
藤有次 青木 豊 内川隆志 粕谷 崇 山本哲也

見学者

青木正洋 赤塚 仁 安孫子昭二 新谷和孝 石村具美 伊藤 健 氏家亜希子 越前慶祐 岡田 裕
荻野早苗 河西健二 可児通宏 絹川一徳 栗山一夫 黒岩 隆 郷司早直 古池晋祿 小林青樹 小
松眞名 小松 学 佐賀和美 佐々木満 柴口真澄 下平博行 白木紀子 関根慎二 谷 和隆 千葉
剛成 中島庄一 中島英子 中村真理子 賛田 明 萩田智子 橋本康司 比田井民子 平林 愛 平
林みち子 堀江武史 三島道子 山本光明 山本哲也 渡辺咲子

(敬称略・五十音順)

報告書抄録

ふりがな	やなぎまたいせきえーちてんだいごじはっくつちようさほうこくしょ							
書名	柳又A地点第5次発掘調査報告書							
副書名	—							
巻次	—							
シリーズ名	國學院大學文学部考古学実習報告							
シリーズ番号	第28集							
編者名	(編集) 小林達雄・宮尾 亨 (著者) 見目有美子、新生 実、菅原伸也、田口 西、津田俊輔、角田真也、仲田大人 中野拓大、中山貴正、新田康則							
編集機関	國學院大學文学部考古学研究室							
所在地	〒150 東京都渋谷区東4-10-28 TEL 03(5466)0247・0248							
発行年月日	西暦1996年3月20日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地名	市	町	村	遺跡番号
柳又遺跡A地点	長野県木曾郡岡田村西野6503-1	20427	21	55°	35'	19940913-	36㎡	学術発掘調査
柳又遺跡D地点	長野県木曾郡岡田村西野6503-3			31°	27'	19930922	8㎡	学術発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
柳又遺跡A地点	遺物包含地	旧石器時代 第Ⅶ層L文化層 第Ⅷ層L文化層 縄文時代 草創期	礎石1基	石器(ナイフ形石器、掻器等)3点、 他に剥片・砕片、礫 石器(ナイフ形石器、槍先形尖頭器、削器等)9点 他に剥片・砕片、礫 土器1点				
柳又遺跡D地点		旧石器時代		石器(ナイフ形石器、槍先形尖頭器、削器等)20点 他に剥片・砕片、礫				